
月色ラプソディ

灯里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月色ラブソーティ

【EZコード】

N3792X

【作者名】

灯里

【あらすじ】

結末なんて最初から分かつてた恋だった。それでも……。

中々素直になれない魔王フェリシアと腹黒神族リュシアンに愉快な魔王城の面々が紡ぐ物語。

『この腹黒神族！ 半径三メートル以内に近寄るなっ！』

腹黒神族×ツンデレ魔王のラブコメディ。時々シリアルス。HPでも公開しています。

登場人物紹介

フェリシア

主人公。愛称はフェリシイ。フルネームはフェリシア＝レグラメント＝ラインフォルト。

薄紅色の髪と孔雀色の瞳を持つ魔族の少女。第二十四代魔王。七大貴族の一つ、魔のレグラメント家の出身。歴代魔王の中でも随一と謳われる魔力の持ち主だが、運動神経は今ひとつ。しかしながら魔術には身体強化のものがあるため、実際はそれほど悪くはない。

王としては未熟な所も多いが、民を想う気持ちは強い。リュシアのことは鬱陶しいと言いつつも、満更でもない様子？

背に黒曜石を思わせる蝶に似た艶やかな翼を持つ種族であり、普段は隠している。

リュシアン

愛称はシアン。神出鬼没の神族の青年。何かとフェリシアにちょつかいを出す。黙つていれば超絶美形だが、口が悪いため、残念美形と称されることもしばしば。

白金色の髪と月色の瞳を持つ。外見年齢は二十歳前後。フェリシア曰く、リュシアンという名は偽名らしい。

神族にしては好戦的で、売られた喧嘩は必ず買う。しかも基本は十倍返しと容赦がない。神術、武術共に申し分ない実力の持ち主で、フェリシアのこともあり、ジュリアやローには警戒されている。

ジュリア

城のメイド長にしてフエリシア至上主義者。夢魔族。優しげな物腰だが実は腹黒。さらりと怖いことを言つ。軽くウェーブがかかつ薄い金髪に、ライトグリーンの瞳。リュシアンとは犬猿の仲。体術、魔術共に凄まじい実力を誇る。有能な人物ではあるが、隙あらばフェリシアの素晴らしさを世界中に伝えようとしているちょっとズレた美女。

アリステイド

愛称はアリス。フェリシアの補佐をつとめる青年。軍師でもあり、頭は良い上に実力もあるがややヘタレ。そのため本来の実力を出しきれないことも……。

ジユリアとは幼馴染。その愛称と容姿からよく女性に間違えられる。フロステイブルーの髪、琥珀色の瞳。特技は料理。濃すぎる面々に苦労が絶えず、魔族ではあるがリュシアンに好意的。

エヴァンジェリン

愛称はエヴァ。血を溢したようなルビーレッドの髪に、薔薇色の瞳。長い時を生きる偉大なる大吸血鬼。七大貴族の一つ、惑のアルカード家の前当主。外見は十四、五歳前後。年増、おばさん、または若作りと呼ばれるとキレる。

当主を退いた今は、自由気ままに宫廷魔術士をしている。レースのようにヒラヒラした服が好き。敬意と畏怖を込めて『鮮血を纏いし夜の女王』の二つ名で呼ばれる。

クロウ

愛称はクロ。黒髪に藍色の瞳。右目に包帯を巻いている。魔王城の台所を取り仕切る料理長。鴉族の少年。

光り物が好き。外見は十六歳くらい。毒物マニアの暗器マニア。気分によって料理を作るため、とんでもない料理を出すことも。いつも眠そう、無口、無表情と三拍子揃っている。昼行灯を気取つているが、実は隠密で戦闘能力は非常に高い。本来はハ咫鳥と呼ばれる存在である。

ロー・ウェル

人狼族の青年。愛称はロー。スチールブルーの瞳に、長い銀の髪を三つ編みにして肩に垂らしている。

騎士団の団長を務めており、剣の腕は国一番と称されるほど。リュシアンとセエレを嫌いしている。

研ぎ澄ました氷のような美貌とその言動からクールに見えるが、実はあがり性で人見知りなだけ。部下たちには厳しいが、慕われている。

セエレ

人族の青年。ブラウンの髪、紫の瞳。自称勇者で魔王を倒すべく魔王城に乗り込んで来たが、フェリシアに一目惚れをして即断念。勝手に魔王城に居座る。

フェリシアの愛の奴隸（自称）。顔だけはいいため、魔王城でもそれなりに可愛いがられている。色々とぶつ飛んだ人物。毎回リュシアンにボコボコにされるが全く堪えていない。

生命力はゴキブリ並で、しつこさに関しては定評あり。愛犬エクスカリバーンを連れている。

この世界、アリア・アースヘルヴは神々の歌より生まれたとされている。対であり、互いに半身である一柱の神。

神竜王グランミユリン。世界を創造した神の一柱。秩序や安定、安寧、昼を司る慈悲深き神。

魔竜王ラインハルト。世界を創造した神の一柱。混沌や変化、混乱、夜を司る雄々しき神。

彼らは元々一つだった。一つであった時とは違い、別たれてしまえばグランミユリンもラインハルトも互いの心が分からず、すれ違うばかりだった。

いつしか彼らは争うようになった。己の存在意義をかけて。互いが憎かつた訳ではない。

愛しているからこそ、神々は争い続けた。互いを分かろうと。元は一つであった神々は言葉を交わすことを知らなかつた。戦うことでしか互いを理解出来なかつたのだ。

そしてある時、彼らは己の分身たる存在を作り出した。グランミユリンは眷属として神族を、ラインハルトは魔族を。そして力なき人の子を。

神族。其は光と秩序より生まれしもの。神なる竜より生まれし存在。

魔族。其は夜と混沌より生まれしもの。魔なる竜より生まれし存在。

人族。其は光と闇より生まれしもの。神と魔なる竜より生を与えられし存在。

神々が眠りについた後、いつしか彼らは争つようになった。互いを理解するためではない、憎しみをもつて。どれほど時が経とうとも変わらず、憎み合う彼らを見て、神々は何を思うだろう？悲しみに暮れて歌い続けるか、それとも何もかもをやり直すのか。全ては神のみぞ知る。

燐々と照りつける太陽に、どこまでも澄み渡る空。今日も平和である。

贅の限りが尽くされた一室に一人の少女の姿があった。アンティークドールのように愛らしい顔立ちをしている。腰まで届く髪は淡い薄紅色で、透き通るような肌はまるで陶磁器のよう。

膝よりも短い黒のスカートに、金糸で刺繡が施された黒の外套は、人形のように愛らしい少女には不似合いかもしれない。

彼女は長い睫毛に縁どられた孔雀色の瞳を細め、目の前の紙切れを睨みつけている。

少女 フエリシアは、執務机に山積みにされた書類と戦いながら、ペンを走らせていた。最近、あの田障りな“あれ”も発生していないし、フエリシアは「機嫌だ。

あれ、が何であるか今は語らないでおこう。

「平和って素晴らしい！」

フエリシアは思わず持っていた羽根ペンを放り投げる。

魔王王ラインハルトより生まれた魔族であるフエリシアが言つ台詞ではないが、思わず叫びたくなった心情を察して欲しい。

「天下の魔王陛下が平和を喜んでいらっしゃるんですか？」

と唐突に聞こえてきた美声に、フエリシアは無意識に椅子から立ち上がり、後ずさった。

しかしその瞬間、電光石火の早業で手を掴まれる。振りほどく暇もない。

フェリシアが呆然とする中、彼女の白い手に唇が落とされる。長い睫毛に縁取られた月色の瞳を閉じ、唇を寄せているのは息を呑むほどに美しい青年だった。

纏う白い服と相まってまるで、光の化身のよう。無造作に束ねられ、左肩に流された艶やかな長い髪は白金で、銀糸よりも煌めいてい。肌は抜けるように白く、一点の染みもない。

何よりも見るものを圧倒するのはその顔立ちだ。美しい、その言葉さえ陳腐に思えるほどの凛とした美貌の持ち主である。見慣れているはずのフェリシアでさえ、見とれてしまつほどに。青年に見とれていたフェリシアはそこではた、と我に返つて叫ぶ。

「！」この腹黒神族！』

叫んだ瞬間、突然巻き起こつた突風が青年を襲う。だが風が青年に届くその瞬間、見えない壁に阻まれ霧散した。鎌鼬もかくやといつほどの突風も青年の前髪を揺らしただけ。

「おやおや、久方ぶりの再会だと喜つのに、酷いですね

「フェリシア様から離れなさい、この疫病神。はあ！」

青年がくすりと笑つた瞬間、扉を開けて飛び込んで来た女が青年に向かつて貫手を繰り出す。

青年はと言えばその美しい顔に微笑を浮かべて女の攻撃をかわしていた。まるで軽業を見ていふよう。

「あの……貴女もいい加減止めませんか？」

「あら？ わたくしがお相手だと物足りませんか？ 忌々しいリュ
シアン殿」

苦笑しながら攻撃を避ける青年 リュシアンに女はにこりと笑つて攻撃を続ける。

その女性もリュシアン同様、人ならざる美貌の持ち主だった。緩やかに波打つ金色の髪は金糸のよう輝いていたし、ライトグリーンの瞳は磨き上げられた宝石よりも美しい。すらりと伸びた肢体、括れた腰と豊かな胸を隠すようにエプロンドレスを身に付けていた。

「あーあー……、また始まつた。あの、ジュリア。おーい！ なんであたしがこんなこと……炎よ、揺らめけ。後は適当に」

一人取り残される形になつたフェリシアは呆れたように女性ジュリアの名を呼ぶが、彼女の耳には入つていない。ジュリアは鬼気迫る笑顔でリュシアンと攻防を続けていた。

フェリシアがため息をついた直後、炎が弾け、凄まじい爆風と熱

が二人を襲う。

しかしリュシアンもジュリアも火傷すら負つていないし、部屋にも焼け焦げた跡などない。

「嗚呼、魔竜王様お教え下さい。何故、あたしがこんな目に合わなければならぬのですか。立派とはまだ言えませんが、自分なりに力を尽くしているつもりです。何故、何故、こんな腹黒神族とかかわり合いにならなければいけないので！」

「運命と思つて諦めてください」

『『いつへん死ね！』』

魔竜王に懺悔を始めるフヨリシアを見て、リュシアンは甘く笑う。運命だと笑う彼に思わずぐらつきながら、フヨリシアとジュリアは舌打ちをして叫んだ。

しかし一人の殺意溢れる言葉にも、リュシアンは楽しげに笑うだけだった。

騒がしい人たち

「折角の再会だといつて、随分なお出迎えですね」

「それは貴様がジュリアを挑発するからじゃろ？ まったく、呆れて言葉も出んわ」

苦笑するリュシアンの声に、呆れたような声が返ってくる。声の主はフェリシアでも、ジュリアでもない、もっと若い少女の声だった。振り向いた先、扉に持たれかかるように誰かが立っている。フェリシアより年は三、四歳ほど下、十四、五歳ほどだろうか。

白い肌は陶磁器のように滑らかで、一点のしみもない。艶やかに波打つ長い髪は血のように赤く、薔薇よりも鮮やかで、アーモンド型の瞳はピンクローズを思わせる美しい薄紅色。

アンティークドールのように整つた愛らしい顔立ちをしているが、人を惑わせる魔性を秘めている。

銀糸、金糸の刺繡が施された厳めしい外套は夜の闇を思わせる漆黒だったが、その下から覗く服はレースとリボンがふんだんに使われたものだった。

「貴様も懲りぬのう。わらわも呆れてものも言えんわ」

「貴女には言われたくないですな。お年寄りは引っ込んでいて下さい。エヴァンジェリン殿」

やれやれ、と肩を竦める少女に、リュシアンは意地の悪い笑みを浮かべる。明らかな挑発に、エヴァンジェリンと呼ばれた彼女の頬がひきつった。

そこへリュシアンが輝くばかりの笑顔で、態とうじじくとじめの一言を放つ。

「おや、失礼。御老体にはもう少し大きな声で話した方がよろしかつたですか？」

「リュシアン」

フェリシアがたしなめるように名を呼んでも、リュシアンは肩を竦めるだけで悪びれる様子などない。「」老体。明らかな挑発である。恐る恐る振り返ると、案の定、怒りに顔を染めたエヴァンジエリンがいた。

「こうなったエヴァンジエリンを止めるのは簡単ではない。彼女の薔薇色の瞳は怒りに染まっている。

「小僧、わらわを老人呼ばわりとは随分、死に急ぎたいよ」じやの

「まさか。貴女を敵に回すほど私は愚かではありませんよ」

「ほやけ」

無駄だと判断したフェリシアは、無視を決め込むことにする。その隣ではジュリアが優雅にお茶の用意をしていた。エヴァンジエリンから殺氣が溢れても、リュシアンは笑みを崩そとはしない。

可憐な少女の姿をしているが、彼女のフルネームはエヴァンジエリン＝アルカード。七大貴族の一つ、惑のアルカード家の前当主であり、『鮮血を纏いし夜の女王』の一つ名で呼ばれる偉大なる大吸血鬼である。

「う見えてこの中で誰よりも年上な彼女に表立つて逆らえる者はそうこまい。」

「やっぱり、クロが作つたお菓子とジュリアがいれるお茶は美味しい」

「恐れ入ります。クロも喜びますよ」

一方、フェリシアはジュリアが用意してくれたティーカップを傾け、マカロンをつまんでいる。迷惑な限りだが、神出鬼没のリュシアンのお陰で最近の魔王城ではこんな喧嘩など日常茶飯事なのだ。彼が何者かなんてフェリシアは知らない。知っているのは彼が神族であることと、自分に興味があることだけ。

リュシアンという名も偽名だろう。リュシアンが魔王城に現れるようになつたのは、今から一年ほど前のことだ。

「陛下、止めなくてよろしいので？ アリスが見れば卒倒しますよ」

傍に控えていたジュリアが微笑を浮かべながら尋ねる。しかし彼女が二人を心配しているからという訳でもなく、ただ騒がしくていいのかというフェリシアへの気遣いだ。

二人が優雅にお茶を楽しんでいる間も、リュシアンとエヴァンジエルはやり合っている。リュシアンは相変わらず微笑みながら、エヴァンジエルはこめかみに青筋を浮き立たせ、罵詈雑言の応酬。一見二人はただ向かい合つているようにしか見えないのだが、二人の間で恐るべき神力と魔力がせめぎ合つている。何も見えないのは二つの力が相殺され続いているからだ。

「やらせておけばいい。頭に血がのぼつてているエヴァはともかく、リュシアンは引き際を弁えているだらうから」

「それは本人の前でおっしゃらない方が宜しいかと。……調子に乗りますから」

エヴァンジエリンは長い時を生きてはいるが、侮辱されることには慣れていない。それはそうだ。前アルカード家の当主で、偉大なる大吸血鬼に正面きつて喧嘩を売るのは自殺行為である。フェリシアとしては彼を褒めた訳ではなかつたが、とてつもなくジュリアの笑顔が怖い。

いいですね、と念を押され、フェリシアは無言で頷くしかなかつた。

「……陛下、これはどうされたのでしょうか？」

恐る恐る執務室に入つて来たのは麗人である。美しい琥珀の瞳に、長いフロスティブルーの髪は絹糸のように背中を流れていた。抜けるように白い肌にすらりと伸びた肢体。裾や袖口が長く、ゆつたりとした白い衣を纏つている。年の頃はジュリアと同じくらいだろう。

フェリシアを陛下、と呼んだことから魔族なのだろうが、清廉な美貌といい、纏う衣といい神竜王に仕える聖職者のようなだ。

「あら、アリス。来てしまつたのね」

「ジュリア……。また、ですか」

アリス、と呼ばれた人物は、部屋の中でやり合つて一人を見て深いため息をついた。憂いを帯びた表情といい、実に麗しいのだが、何故だかかなり疲れたような雰囲気が漂つていて。

だがジュリアはそんな『アリス』を一瞥しながらあつけらかんと言ひ放つ。

「一応、実害はないから放つていいんだけれど」

「陛下の執務の邪魔になつていると思いますが……」

「……」からどう見ても女性にしか見えないが、彼女ではなく、彼である。彼を見た者はまず間違いなく、女性というだろ。柔らかな物腰といい、麗しい容貌といい。

本来の名はアリストイド。いつ見えてれっきとした男であり、フェリシアの補佐をつとめる非常に優秀な青年である。

「ジュリアがいながらの有様ですか……」

「あら？ 不毛な争いを止めるほど、私は馬鹿ではないわよ。それより、アリス。あなたも一緒にどう？」

ふう、と深いため息をついて頭に手を当てるアリストイドに、ジュリアはのほほんと言つ。ジュリアとフェリシアは二人などそっちのけでお茶を楽しんでいるではないか。

彼女の言つ通り、彼らの争いを止めても数分後にはもう再開されるのだから意味が無い。つまりは不毛だ。

しかし、だからと言つて魔王陛下の執務室で私闘をされでは困るというもの。

だが肝心のフェリシアは止める気もないようで、ジュリアも同様だ。そうなればアリストイドが止めるしかない。

「残念ですがお断りします。先にリュシアン様とハヴァンジョン様を止めなければなりませんので」

「アリス。リュシアン様付けなんてしなくていいの」

ティーカップを持ったフェリシアが眉間に皺を寄せている。リュシアンは神族で当然、魔族との仲は悪い。天敵と言つても過言ではない相手に様付けは不要だということだ。

しかしながらこれは意図したことではない。何せ、アリストイドの癖である。

「……申し訳ありません。癖のようなものですから」

頭を垂れてリュシアンとエヴァンジエリンに向き直る。相手はアルカード家の前当主と神族の青年。アリストイドも七大貴族のファーリエル家の出ではあるが、流石に『鮮血を纏いし夜の女王』の間に割つて入るのは色んな意味で勇気がいる。

けれども敬愛する魔王陛下がしないのなら、一人を止めるのは補佐であるアリストイドの役目だ。

「お一人ともそれくらいにして下さい。魔の力よ、私に従いなさい」

歌うようにアリストイドが言葉を紡いだ瞬間、リュシアンとエヴァンジエリンの動きが止まる。不可視の魔力の鎖が一人を縛めていりなのだ。

いくら彼らが互いしか眼中になかったとは言え、こうも簡単に一人を拘束する彼も只者ではない。普段はその柔らかな物腰と自信のない態度に隠れているが、アリストイドは非常に優秀である。フェリシアの補佐としても、魔術の使い手としても。

「まあ、今日はアリスに免じて許してやるわ」

「奇遇ですね、私もです」

背筋が凍るほど冷笑を浮かべて、エヴァンジエリンとリュシアンは同時に肩から力を抜いた。今ではリュシアンを止めるのは殆どアリストイドの役目である。

やつと大人げない喧嘩をやめた二人に、アリストイドは本日何度目になるか分からぬため息をついた。

「それで、アリスは何をしに来たのじゃ。まだお主がやつて来る時間ではないだろ?」

はて、と首を傾げたのはリュシアンと、今しがたまでにらみ合っていたエヴァンジエリンだ。アリスティードがフェリシアの執務室にやつて来る時間は決まっている。

今日はそれよりも三十分ほど早い。と言ひ事は何か用でもあると考えるのが自然ではないだらうか。

「クロウ様が新作の味見をして頂きたいそうでして……」

アリスティードがここに来た理由を語つた直後、執務室の扉が開かれる。ドアが開いた先に佇んでいたのは一人の少年だつた。年はフェリシアよりやや年下、十五、六歳くらいに見えるが彼も魔族であるためあてにならない。

艶やかな濡羽色の髪に藍色の瞳。ただ右目には包帯が巻かれていが、巻き方が緩いのか金色の瞳が半分ほど覗いていた。

服装は袖が長く、裾も床に引きずるくらい長い不思議な装束で、顔立ちは整つているものの、何だか眠そうである。

そんな彼は銀のトレイを手にしていた。白い皿の上に乗つているのはなんと、フェリシアの顔をデフォルメしたような非常に精巧に作られた薄紅色の饅頭だつた。

クロウ、らしき少年は無言でつり、トレイを差し出す。

「銘菓、魔王饅頭、だそうです」

「銘菓？」

「魔王饅頭？」

よく分からぬアリストイドの説明にフェリシアとエヴァンジョンジルンは首を傾げている。ちなみにリュシアンは普段と変わらぬ感情の読めない笑みを浮かべ、ジュリアは全く驚いた様子はない。

それどころか何故か瞳を輝かせてフェリシア饅頭に見入っていた。

オウム返しのようなフェリシアとエヴァンジョンジルンの言葉にクロウはこくん、と頷く。彼は少年の姿をしてはいるが、この魔王城の厨房を取り仕切る料理長なのである。

もつともそれは料理という趣味を兼ねたもので、彼の表の顔でしかないのだが。時折こうして思いついた料理を持ってくるのだが、今日は饅頭らしい。何故フェリシアの顔を模しているのかは皆目見当がつかないが。

「で、何をどうしたらあたしの顔が饅頭？」

「何を仰るのですか、陛下。素晴らしいですわ。クロ、よく思ついてくれました。これでフェリシア様がどれだけ素晴らしいか布教できると言つもので。さあ、アリスト。このフェリシア様饅頭をありとあらゆる国に流してしまいなさい」

「うーん……、と唸りながらクロウが持つた饅頭と睨み合つフェリシアに、ジュリアは人が変わった（彼女の場合は魔族だが）ようにライトグリーンの瞳を宝石のように輝かせている。

突然話を振られたアリストイドはと言うと、疲れたようにため息をついた。フェリシアのこととなるとこの幼馴染は人が変わるので。

「本当に貴方も大変で」

「……恐れ入ります」

やや呆れたような微笑を浮かべるリューシアンに、アリストイドは力なく言葉を返した。彼は神族で、魔族と敵対していると言つていのだが、それはアリストイドの性格によるものだらう。

魔王陛下の補佐も色々と大変なのである。……といふがリュシアノも含めた彼女の周りの連中が。

「ジュリア、落ち着いて下さい。まだ試作の段階ですから……」

瞳を煌めかせるジュリアに、アリストイドがおずおずと言ひ。これはまだ試作の段階だし、大量生産をするなら考えるべき」とは沢山ある。

しかしながら、彼女が言つよつにこのフェリシア饅頭を持つてすれば幾分か魔族の悪いイメージを払拭出来るかもしぬれない。何せこんな可愛らしい少女が魔王だと人間たちは知らないだらう。

「まず中身を確かめねばなりませんね。陛下、申し訳ありません。お顔を……」

「あの、ジュリア。別にあたしの顔じゃないし、謝らなくていいから

何故か眦にうつすらと涙を溜めるジュリアは、壊れものを扱うような手つきで饅頭を手にとつた。そんな彼女に冷静にツッコミを入れたのはフェリシア本人である。

いくら自分を元にして作られた饅頭であつても、謝られると変な気分になつてくるではないか。

「そしてお前は食べるなー 食べるならクロロに食べて貰うからーー！」

フエリシアはリュシアンが持つている饅頭を引っ取り、眠そうにしているクロウの口に放り込む。ちなみに運動神経はイマイチなフエリシアである。リュシアンなら避けることも簡単だつたひつ。それをしないのは面白そだから、に違いない。彼も大概性格が悪いのだ。何せフエリシアから腹黒神族と罵られるくらいである。

「……まったく、フエリシアも厄介なものに好かれたものよ」

ふう、と息を吐いたエヴァンジエリンは哀れむよつた視線をフエリシアに向ける。自作の饅頭を咀嚼していたクロウも彼女の言葉に無言で頷いた。

「なるほど。この薄紅色は桜の花弁を練つてしているのですね。中の餡も程よい甘味で、苺の酸味とぴったりです。流石はクロ。これで気まぐれを起こさなければ言つことはありませんが……」

饅頭を半分に割つて口に運ぶ。ジュリアの口から感嘆のため息が漏れた。もつちつとした生地は、桜の花弁を練つて作られたものらしい。中の餡も甘過ぎずちょうどいい甘さで、丸ごと使われた苺の酸味が最高だ。

時たま作るゲテモノ料理さえなければ料理長としても最高なのだが。

「それは無理じゃの」

「クロウ様は気まぐれですからね」

ヒヴァンジエリンが即座に返事をし、アリストイドは苦笑した。クロウはある意味、天気よりも気まぐれだ。作りたい時に作りたいものを作る。とんでもないゲテモノが出て来る時もあれば、玄人の舌を唸らせる素晴らしい料理を作ることもある。

話の中心にいるはずの少年は眠そうに瞬きをしているだけで、話など聞いてすらいなかつた。

「毒入つてないだけマシよね。何ならリュシアンのものにだけ入れてもいいんだけど」

「それなら心配いりません。私、大抵の毒なら効きませんから」

フーリシアとしては嫌味を言つたつもりだったが、さらりとかわされたばかりかとんでもない答えが返つて来た。

クロウは人畜無害な外見とは裏腹に、暗器マニアで毒物マニアである。自分で毒を調合するくらいの凝りようで、彼の私室にはありとあらゆる毒物が貯蔵されているとか。

纏まりのない面々

「毒が効かない？」

「それは残念です」

フェリシアは不思議そうにリュシアンを見返し、ジュリアはさも残念そうに笑う。いくら魔族や神族であっても不死身ではない。毒を盛られれば当然死ぬし、殴られれば痛い。

人間よりずっと頑丈な者もいるが、反対に虚弱体质の者だつている。

「大体の毒には耐性がありますし、ないものでもよほど即効性ではない限り、神術で浄化出来ますから」

魔竜王ラインハルトの力を借りて行使する魔術とは違い、神術は神竜王グランミュリンの力を源としている。

その効力も治癒や浄化が中心であり、攻撃や身体強化に特化された魔術には存在しない効果があった。リュシアンの言う通り、彼ほどの神力の持ち主ならば、クロウの毒とて浄化出来るかもしねりない。

「……なら一度試しても面白いかもしませんね、陛下」

「許す。やうう、今直ぐに」

「やりません」

極上の、だがどこか闇を含んだ笑みを浮かべて提案するジュリアに、フェリシアも即座に頷く。

しかしながら、一秒もしないうちに満面の笑顔で拒否された。彼女のことだ。毒だけでは物足りず、足や手、魔術までも出そうだ。どうせするなら、あの自称勇者様に犠牲になつて貰えぱいいではないか。

「止めておけ。のたうち回る神族など見ても暇つぶしにもならんわ」

「ああ、年を取ると耳も悪くなりますからね。本当に年は取りたくないものです」

ふん、と鼻を鳴らすエヴァンジェリンは随分立腹らしい。

しかし彼女を怒らせた張本人は、相変わらず笑つて失礼な言葉を吐いていた。

二人の間に挟まれたクロウは、ぬぼーつ、と饅頭を食べているし、アリストイドはどうしていいか分からずおろおろしている。

フヨリシアは我関せずといった雰囲気を振り撒いて机に向かっているし、ジュリアに至つては止める気もない。

書類の整理を始めた敬愛する陛下のためにお茶の準備をしているのだ。どいつもこいつも、何といつか纏まりのない面々である。

「……危険」

ぼそり、と呟いたクロウはまだまだ眠そうだ。ただ、少年の視線は隣 肩を震わせるアリストイドに向いている。

「エヴァンジェリン様、リュシアン様！ いい加減になさつて下さい！」

フヨリシアとジュリアが異変を感じた時には遅い。アリストイド

が声を張り上げた瞬間、空気中の水分が音を立てて氷結をはじめた。吐息が白くなり、瞬く間に周囲の気温が下がる。冷氣の中心は言わざもがなアリストイド。

「アリスト！」

ジュリアが思わず彼の名を呼び、フエリシアが勢いよく立ち上がる。幼なじみの声に我に返つたのか、彼は隣のクロウを見て仰天した。

なんと少年の体半分が凍りついているではないか。当の本人はと言えば平氣そうに、だが盛大なくしゃみをして鼻をすすつていた。

「寒い……」

「クロウ様！ 申し訳ありません！」

「へいわ

慌てて“力”の放出を止め、謝るアリストイドは顔面蒼白だ。見ているフエリシアたちが氣の毒なくらいに。すると、肌を刺すようだつた冷氣は消え、冷えた空氣も元に戻つていて。

このままアリストイドが力を使つていれば、間違いなくここは冷凍庫と化していただろう。

「……まことに申し訳ありません」

「アリストが謝る」とない。だから氣にしないで

「陛下のおつしやる通りです。悪いのはエヴァンジエリン様とその真つ白ですから」

頭を下げるアリストイドは可哀想なぐらい肩を落としている。エリシアが気にするな、と笑えば、ジュリアは輝くばかりの笑顔でリュシアンとエヴァンジェリンを睨み付けた。リュシアンに至つては“真っ白”呼ばわりだ。

「真っ白ですか。ジュリア殿も全く分かりづらい例えを……」

「いやいや。真っ白はこの中に一人しかいないから!」

困りますね、と肩を竦めるリュシアンはどう考へてもおかしい。この中で“白”は神族であるリュシアンただ一人だ。

白金色の髪に白い長衣といい、思わずフェリシアが突っ込んでも、青年は薄く笑うだけだった。

アリストイドは魔族の中でも雪麗せきれいと呼ばれる種族で彼の場合、感情が高ぶることで力が暴発してしまう。つまり人間（といふか魔族）冷凍庫のようなものである。

今回はそれを知つていながら、くだらない言いあいをやめない一人が悪い。本人に自覚はないが、ある意味ではアリストイドこそ最強かもしぬれなかつた。

「危うく銀世界になるところだつたわ。わらわは火と氷は好かん。ああ、アリストがどうこうと言つておる訳ではないぞ?」

「は、はい……」

ふう、と息を吐いたエヴァンジェリンは、外見には似つかわしくない老獴な笑みを浮かべた。彼女は所謂吸血鬼、とされる種族。彼らの力の源は血だ。

しかし火は血を焼き尽くし、アリストイドの力は血を凍りつかせる。一概には言えないが天敵、と言つても過言ではないかもしない。

「フェリシアわ…… へぶつー！」

とその時、開け放たれた扉が勢いよく閉められた。他でもないリュシアンの手で。『ん、と言う音と共に何かがぶつかつた盛大な音が響き渡る。

被害にあつたのは間違いなく“彼”だろう。人族にして自称勇者、そしてフェリシアの愛の奴隸である。

「これで安心です」

「今回ばかりはよくやつた、リュシアン」

晴れやかな笑みを浮かべるリュシアンに、フェリシアも労いの言葉を掛ける。

だがしかし、ここに納得していない者が一人。

「いいえ。たちの悪さでは断然、こちらの方が上です

他でもないジュリアである。“あちら”は鬱陶しいだけでもまだ可愛いものだ。

だがこちらは違う。鬱陶しいだけの彼と策士な神族では比べ物にならない。清廉潔白のはずの神族がどこをどう間違つたら“これ”になつたのか。

「お褒め頂き光栄です。ですが私は神族。神竜王に誓つて清廉な神族ですよ」

輝くばかりの笑顔からはひと欠片の邪氣も感じられない。美しく、
清い神族そのものだ。……中身は別として。

結局、それから約一ヶ月後、フェリシアの承認を受けたアリス（
半ば強制的なジユリア）の命により、魔王饅頭は名物として売り出
されることになる。

恋に落ちました

初めて“彼女”を見た時、なんて可愛らしい人なんだとセエレは思つた。とても倒すべき魔王とは思えなくて、一瞬で彼女に見入られていたのだ。

象牙や黄金をはじめとした貴金属がふんだんに散りばめられた玉座に腰掛け、セエレを見下ろしているのは少女だった。人間で言うなら、十六、七歳くらいだろうか。

腰まで届く艶やかな髪は、淡い薔薇のような薄紅色。長い睫毛に縁取られたアーモンド型の瞳は田にしたこともない美しい孔雀色をしていた。

抜けるように白い肌には一点の染みもなく、まるでアンティーケードールのようだ。短いスカートに、金糸の刺繡が施された黒い外套を身につけた彼女は、後数年もすれば絶世の美女となることだろう。しかしセエレの目には魔族全てを束ねる魔王というより、触れれば折れてしまいそうなほど華奢な少女にしか見えなかつた。

「お前が、私を倒しに来た勇者というのは。人にしては珍しい紫水晶のような瞳をしているな。……このまま大人しく出ていくと誓うなら命だけは助けよう」「う

足を組み、尊大に彼女は言つた。鳥が轉ずるような美しい声だというのに、少女の声には魔王としての威厳に満ちている。ただ違和感を感じたことから、無理をして喋つているのだろうか。

セエレは今まで瞳を讃められたことなど、生まれてこのかたなかつた。魔族にしては珍しい、とは言えない瞳の色も人族では違う。

紫の瞳は魔族の証だ、忌み子だと罵られ、蔑まれながら生きてき

た。瞳の色が皆と違う。ただそれだけで。

だから恋をした。落ちるのは一瞬。セエレは彼女に恋をしたのだ。

何だかあり得ない重みにセエレの意識は浮上する。腹が重いのだ。
何故か柔らかくて暖かい何かと、かたくて冷たい何か。

うつすらと目を開くと、真っ白な犬と黒に銀の細工がされた軍靴
が視界に飛び込んで来た。

円らな黄色い瞳を向けているのは、セエレの愛犬エクスカリバー
ン、通称エクス。ではこの軍靴は誰だろう?
ふと視線を上げると、絶対零度の眼差しをした青年と目があった。

「やつと起きたか。大馬鹿者が」

セエレを見下ろしていたのは、二十歳から二十代前半ほどの美しい青年である。細身であるものの、しなやかで鍛え上げられた体から弱々しさは微塵も感じられない。

銀糸の刺繡が施された黒の軍服を隙間なく着こなし、同じく銀の縁取りがなされた軍帽を被つている。

長い銀糸の如き髪は三つ編みにして右肩に流しており、耳はセエレのそれと同じではなく、銀の狼の耳をしていた。切れ長の瞳は薄氷を思わせる灰色掛かつた青で、軍靴をセエレの腹に乗せたままである。

「貴様は犬以下か。分かつたらさつさと起きろ」

「おはよびござります、ロー団長！」

セエレは元気よく返事をすると、腹からエクスカリバーンを退かして青年に敬礼した。永久凍土もびっくりの冷たい視線でセエレを見下ろしている青年こそ、国一番の剣の使い手と謳われ、騎士団長も務める人狼族のロー・ウェルだった。

何故騎士なのに軍服かと言うと、身軽な人狼族に鎧など不要だからだ。

セエレの腹から下ろされたエクスカリバーンは、嬉しそうにロー・ウェルのそばを走り回っている。犬と狼で相性でもいいのだろうか。飼い主より懷いているような気がしてセエレは少し面白くない。

ロー・ウェルはエクスカリバーンの頭を撫でてやると、芸術品のような美貌を歪め、鬼の形相で背後の少年を睨み付けた。

「フレディ。やはりお前に任せた俺が馬鹿だつたらしー」

ローウェルの後ろにいる少年は、十代半ばから後半ほどだらり。短く刈られた小麦色の髪に忙しなく動き回る瞳。ローウェルより幾分か装飾と刺繡が少ない黒の軍服を纏っている。

ただしきつちりと着こなす彼とは違い、フレディと呼ばれた少年はかなり適当な上に好き勝手に着崩していた。

白いシャツのボタンは二つ以上あいているし、上着はただ羽織つただけ。軍靴は泥で汚れており、折角の銀の細工が散々である。おまけにネクタイはしていないし、軍帽すら被つてもいない。身も凍るような団長のおしかりも彼には全く効果がないらしく、悪びれる様子すらなくにつこりと笑っている。

「迎えに来たよ。ただ一度寝ただけで」

「それが馬鹿だと言つていい。お前の頭は花畠か、それともただのお飾りか。考えることを止めて退化してもそれはお前自身の責任だ。ペシトとして可愛がつてもらえ」

あははは、と視線を逸らして頭を搔くフレディに容赦のないローウェルの声が飛ぶ。身体能力や戦いで駆け引きに関して文句はなくとも、問題は“頭”の方だ。

考えるより先に体が動くタイプであるフレディは、あまり深く考えようとしない。そもそも考える気さえないので。

悩みがない、といつては素晴らしいが、本能だけで動くならうとこそ獸と同じではないか。

だから常日頃から頭を使えと言わわれているのだが。

ローウェルの言葉で言つながら、フレディの頭は万年お花畠状態で

ある。

「やして貴様は何をやつて居る？ わざわざと着替えて用意をしや。 もないと陛下に言つて仕合つてしやう」

「さよー。 酷いですよ、団長。 フリシア様の愛を疑つたですか？」

「だからどうしてやつなる」

とんでもないことを口走るセヒレ、ローウェルは冷静に突つ込む。何だか色々ずれまくつている青年である。恐るべしセヒレ。フレディはとつと、これ幸いとエクスカリバーンと遊んでいた。もつとも、遊んであげている、とつより遊ばれている、と詰つ方が正しいかも知れないが。

人族であるはずのセエレが何故、魔王の城で暮らしているのか。それは一重にフェリシアが原因である。勇者と言つていのいい厄介払いをされたセエレは、魔王を倒すために城へとやって来た。魔族の国に入つても怪しまれなかつたのは、彼の紫の瞳のせいである。

しかしながら、世の中そう甘くはない。直ぐ様目の前の青年、ローウェルに捕まり、魔王の前に引きずり出されたのだつた。

だがフェリシアに一目惚れしたセエレは勝手に魔王城に居座り、呆れた彼女がローウェルに任せた、といふか押し付けたのだつた。

「では団長、早速交代に……」

「貴様は行かなくていい。フレティ、お前もいつまで犬に遊んで貰つてゐつもりだ」

軍帽代わりにエクスカリバーンを頭に乗せようとしたセエレの動きが止まる。両腕を組み、仁王立ちで立つローウェルの姿はかなりの迫力があつた。

セエレは一応、軍服を着ることを許されてはいるが、騎士でもないし兵士でもない。よつて歩哨を交代する必要もないのだ。

「えー、もつとエクスと遊びた……」

「なら一生遊んでる。それといつも言つているはずだ。敬語を使えとな」

「冗談なのに。ローグー長……すみません、冗談が過ぎました」

フレディが不満そうに唇を尖らせた瞬間、彼は文字通り、画像のように固まつた。ローグー長を本気で怒らせたら恐ろしいじるの話ではない。

殺氣すら漂つてきそうだ。あまりの迫力に、エクスカリバーンがきゅーん、とセヒレの頭に飛び乗つた。

「おはよっござります、今日も賑やかですね」

そこへ、ローグー長でもフレディでも、ましてやセヒレでもない第三者の声が響く。

思わず聞き入つてしまいそうなほど心地のよい声だが、ローグー長には忌々しい以外の何ものでもない。“彼”の姿を視界に捉えたフレディが思わず叫ぶ。

「出た！」

「失礼ですね。私は台所に発生する“あれ”でも、夏に需要がある“それ”でもありませんから」

失礼ですね、と言いつつも彼が気分を害した様子はない。台所に発生するあれ、は茶色いモンスター？で、夏に需要のあるそれ、は背筋が寒くなるものである。

思わず見惚れるような笑みを浮かべているのは、無駄に美形な青年だった。ここにいる誰とも違つ色彩を纏う彼が魔族ではないことは直ぐに分かる。

月の光を集めたように煌めく髪は金掛かった銀色。長いそれを金輪で纏め、肩に流していた。影を作るほど睫毛に縁取られた瞳は、

珍しい月色。

裾の長い白の衣に、左肩には月の装飾が付けられている。月の覚めるような、それでいてこの世のものではない美貌の青年は、月光の化身というふさわしいかもしれない。

青年の姿を捉えたローウェルは無言で抜剣し、一瞬にして距離を詰める。

しかし、青年はまるで羽根でも生えているかのように軽やかに彼の間合いから逃れた。

「いつも熱烈な歓迎、ありがとうございます」

「寝言は寝て言え」

「残念ながら私は寝ていませんし、朝の運動には丁度良いでしょうね」

笑いながらローウェルの剣を避ける青年と、追撃の手を緩めないローウェル。これが魔王城の日常である。

ローウェルは国一番と謳われるほど剣の使い手だ。彼も本気を出していいにせよ、青年リュシアンも危なげなくローウェルの剣をかわしていく。それも必要最低限の動きで、まるで円舞でも踊るように軽やかに。

ローウェルは冷たい表情で剣を振るい続け、リュシアンも笑みを湛えたまま、彼の攻撃を避け続けている。

一人にしてみればこの程度のやり合い、朝の散歩程度のものなのだろう。しかし、

「あ、いた。いたたた……」

いつの間にか、何故かセエレを挟んでやりあつていいのではないか。ローウェルの剣がセエレの頬や腕を掠める。下手に動けば首が飛びそうだ。

勿論、ローウェルはそんなへマなどしないだろうが、セエレは人族である。ローウェルにとつてどうでもいい存在には変わりない。

「うわー、いいな、セエレ。俺も混ざりたいなあ」

「止めといた方がいいと思つよ。このくらい、フェリシア様への愛で……へぶつ！」

エクスカリバーンを頭に乗せ、飛び出したくて堪らないと言つた風のフレディにセエレが笑う。物事を彼らの基準で考えると痛い目にあう。フレディが強いことは知つてゐるが、あの二人が怖すぎるのだ。

瞬間、愛しのフェリシア陛下のことを思い浮かべようとしたセエレの頬に強烈な一発が入つた。

「ああ、すみません。手が滑りまして。でも剣を使わないだけ手加減はしていますよ」

わざとらしく、だがにこやかに微笑むリュシアンの仕業である。偶然ではなく、明らかに確信犯だ。神族は本来、争いを好まず、気性の穏やかな者ばかりだというのに彼はその範疇から外れていた。確かに物腰は柔らかだが、自分から喧嘩をふっかけたり、基本は十倍返しと容赦がなさすぎる。

紙のように吹き飛ばされたセエレはと言えば、何とぴんぴんしていた。傷という傷もなく、頬がつっすらと赤くなっているだけだった。

「分かります、僕の愛故に、ですね。リュシアン殿」「私にはまつたく分かりませんが。可哀想に。頭でも打つておかしくなりましたか」

自分の世界に浸りまくっているセヒレに、リュシアンの冷たい視線が飛んだ。ちなみにその間もリュシアンとローウェルの攻防は続いている。

「なあ、エクス。何して遊ぼうか」

「ウウ、ワフフー。」

「ん？ そうか、そうか」

そんな中、一人と一匹は騒がしい面々などそっちのけで、ほのぼのとした雰囲気を醸し出していた。

神経毒は重要です

魔王陛下はそれなりに忙しい。お飾りではないため当たり前だが、人族の王は魔族と違つて実力主義ではなく、世襲制が多いのだとう。

勿論、フェリシアも午前中は偉大な魔王となるために勉学に励み、午後からは膨大な書類の整理とかなり多忙である。

しかしながら、魔王城の書類の殆どを一手に引き受けるのはアリストイドであり、フェリシアとは比べ物にならない速さでそれをこなす。

普段から苦労が絶えず、濃すぎる面々に押され氣味な彼だが、魔王の補佐役としては非常に優秀だ。

「ああ、アリス。フェリシア様の様子はどう?」

「勉学に励まれてましたよ。今日はクロウ様の薬物学だつたと思いますが」

椅子に腰掛け、執務用の机を前にしてアリストイドはひたすら山積みになつた書類を捌いていた。声の主 ジュリアに一切視線を向けることもなく。

見なくても魔力の気配で分かるし、それでなくともアリストイドが彼女の声を聞き間違うはずもない。

「……クロウは優秀ではあるけれど、偏った知識を与えそうで……。それにしても懲りずにまたやって来たようね。それに、ローはかからかいがいがあるから、格好の遊び相手にされて……。嘆かわしい」

クロウは隠密としては申し分ないが、彼の知識は偏り過ぎている。

おまけに授業中も殆ど喋らないため、フェリシアの一人芝居に見えそうだ。

ちなみに彼女が、懲りずにやつて来たといったのは、言つまでもなく無駄に美形な神族の青年である。

ローウェルはクールで近寄りがたく見えて、実はかなりの人見知りである。彼のあの性格は言わば他人から自分を守る鎧。リュシアンはそんな彼をからかうのが好きなのだらう。

「私たちに知らせるよつて、わざと気配を漏らしておられるよつですしそう……謎が多い方ですね」

それなのだ。アリストイドが言つよつに、リュシアンはいつも気配を隠そとしない。まるで自分たちに知らせるよつに。

そんなこともあり、ジュリアは得体の知れない彼が気に入らないのだ。

「まつたく忌々しい。夢にさえ入れれば、至上の悪夢を見せてやれるのに」

「……ジュリア。貴方は陛下が絡むと過激になるんですから。少しはおさえて下さい。ジュリアまでそれでは私がもちません」

美しい、だが背筋が凍るような笑みを浮かべる幼なじみを、どうにか宥めようとするアリストイド。彼女は夢魔族であり、大抵の相手なら悪夢を見せて惑わすことは容易い。

しかし神竜王グラムミコリンの加護を受けたリュシアンには悪夢を見せるどころか、夢にさえ入れないので。

「あら、いいじゃない。アリストイドがいるんだから」

「あのですね……」

少しあは抑えてください、といつアリストイドにジユリアは不思議そうに答える。適当に聞こえるが、裏を返せばそれは彼女がアリストイドを信頼しているということ。

フェリシアの補佐が彼でなければ、ジユリアがこうもはつちやけることも無かつたかもしれないが。表面上は穏やかで、物腰も柔らかなジユリアだが、それは彼女の表の部分でしかない。

「そういう問題ではありません。あなたはいつもそうなんですから」

書類を捌く手を止めてアリストイドは苦笑した。この幼なじみはいつだつてそうなのだ。

それでも彼女がいなればアリストイドがここにいることもなかつただろう。

「そろそろあれを止めないと。ローも限界かしら。それじゃあ、アリスト。また後で」

誰かが止めないとあの神族は、更に面白がるだけだ。まだフェリシアにちょつかいを出さないだけマシだが、その点は配慮しているのかしてないのか。

ジユリアはしばらく書類を片付けるアリストイドを眺めていたが、身を翻して部屋を出た。

フェリシアはそつと田の前の少年を見上げた。少年 クロウは眠そうに藍色の瞳をしばたかせてている。本当に眠い訳ではなくそう見えるだけだ。

年の頃はフェリシアと同じしか少し下くらいだが、彼が自分よりずっと年上だということをフェリシアは知っている。

普段は趣味が高じて料理長などやっているが、彼の本業は隠密。見た目からはまったく分からぬが、大量の暗器を隠し持っていた。

ジュリアが前もつて用意してくれていた紅茶を口に含みながら考える。

どうしてこんな時に限つて“あいつ”は来ないのだろう。そう考えてフェリシアは自己嫌悪に陥つた。何故自分がリュシアンを待つ

ているのか。

自分で自分を殴りたい気分である。フェリシアが百面相をしていると、

「……ん？」

クロウが小首をかしげて、不思議そうにフェリシアを見つめていた。

そんな彼の視線に気付き、慌てて首を横に振る。

「なんでもない！ なんでもないから！」

「ん」

危うく失態を晒すやうすところだつた。危ないところである。額に浮かんだ冷や汗を拭い、手元の本に集中する。

しかしながらまったく頭に入つてこない。悲しい限りだ。

「へいき？」

「うん。こめんね、クロ」

彼にまで心配をかけるなんて魔王失格だ。フェリシアは自分がまだ未熟だと言つことは理解しているし、だからこそこうして学んでいるのだが、情けない限りだ。神族に弱みを見せてはならないのに。どこまでいっても魔族と神族は相容れないのだから。魔魔王ラインハルトと神魔王グラントミュリンのようだ。

考えるなど自分に言い聞かせてみても、中々上手く行かない。あいつの気配を感じるからだろうか。気配を漏らしているのは、完全

にわざとである。何もかも気に入らない。

リュシアンだけでなく、分かつてているのに気がなつて堪らない自分にもいらいらした。

リュシアンはただの神族だ。神族にしては風変わりで、変なやつだとしても。

「神経毒は……重要……」

その間もクロウの授業は続く。様々や毒草や毒花など、彼の口数は少ないが、実に分かりやすい。流石は毒物マニアである。しかしながら、今のフェリシアの頭にはまったく入つてこないが。すつ、とクロウが左手を上げた瞬間、何かが放たれた。フェリシアには目視出来なかつたそれは、銀色の光だらうか。

「……セニ」

「うわー」

聞こえた声はクロウのものでも勿論、フェリシアでもない。

突然目の前に現れたのは一十歳前後の青年だつた。クロウが投擲したのはどうやら苦無だつたらしい。鈍く光る刃は、青年を逃さぬよ、彼の袖をしつかり縫い止めていた。

「げ……」

青年の姿を目にしたフェリシアが嫌そうな顔をする。一見すると魔族らしき青年だ。さらりと流れる髪は闇色で、瞳はセエレと同じ紫。

抜けるように白い肌には一点の染みもなく、降り積もつた白雪のよう。ただ身に纏つ服は髪と正反対の白だつた。

しかし彼が魔族ならば、フエリシアがここまで嫌な顔をするのはおかしい。何故なら、魔族たちは全てフエリシアの民なのだから。

「げ、って何だよ。げってのは

やや呆れたよつこ、だが楽しそうに笑う彼は、フエリシアの民でもなければ魔族でもない。闇色の髪と紫の瞳という魔族の色を持ちながらも、彼は正真正銘の神族で、リュシアンの親友 ソールである。

もつとも、親友と口にすればリュシアンが非常に嫌そうな顔をするのだが。

「それ、毒塗つてある……」

「流石クロ。えつと何毒?」

相変わらず眠そうな顔をするクロウが何気なく呟つ。暗器マニアで毒物マニアである彼だ。

武器に毒を塗つているのは、おかしいことではない。

フエリシアが瞳を輝かせて尋ねると、眠そうな声で神経毒、と返つてきた。

「う、嘘だろ?」

「……冗談。本気とした?」

途端に真っ青な顔になつて恐る恐る問つ青年に、クロウは平坦な声で答えた。冗談だと。

へなへなと崩れ落ちる青年を見て、魔王城の料理長はほんの僅かに微笑んだ。誰より恐ろしいのはこの少年かもしれない。

「で、何の用?」

魔族の色彩を持つ神族は、一向に出で行こうとしない。じつとフエリシアを見つめているため、居心地が悪いたらありやしない。しかし邪魔をする訳ではないから、対応に困る。それはクロウと同じだらう。

少しでも邪魔をすればクロウは容赦しない。袖に仕込んでいる鋼糸で細切れにされても文句は言えないはずだ。いくら神族とは言え、彼の攻撃からは逃れられまい。……流石に細切れまではしないだろうが。

「ん? 姫さんの顔見たかつただけ」

「どうかの誰かと一緒に冗談言わないで。あたしは姫さんじゃないから。……でも、どうして姫さんなの?」

今日のフエリシアはすごいぶる機嫌が悪い。そもそも姫さんとは何だ。自分はれつきとした第一十四代魔王だというのに。

しかしいくら口を酸つぱくしても、ソールはフエリシアを

『姫さん』と呼ぶのだ。

「そりや、シアンの“姫”さんだからな。いやあ、あれを連れ戻す俺も大変なんだぜ?」

「は? そんなの知らないからー 連れ戻すなら首根っこでも掴んでさつと連れて帰つて」

何がリュシアンの姫さん、だ。魔術でこの神族を吹っ飛ばしてもいいのだが、セエレ並みの耐久力（ゴキリ並みともいう）のためやる気も起きない。無駄な労力を使つほど、フェリシアは馬鹿ではないのだ。

ソールはどうやら、リュシアンを連れ戻すという役目を持つているらしい。

しかし、彼がリュシアンを捕まえられることはまずない。フェリシアとしてみればイライラの原因である“あれ”を早く持つて帰つて欲しいのだが。

「それが出来れば俺も苦労しないって。ほら、お陰で髪と瞳がこんな色に。きっと心効だぜ？」

「……それ、生まれつき」

「だあー、もうー。御託はいいからー。そっちの神族らしからぬ色は元からだし、大体リュシアンはここにはいないのー」

な、と笑つて髪を弄るソールにクロウから冷静な突つ込みが入る。彼は元から闇色の髪と紫の瞳だし、明らかにストレスとは無縁の者が何を言う。

そもそもリュシアンを連れ戻しに来たのなら、まず場所を間違つているではないか。

「いえ、ソーはあつてますよ。ちゃんと、ね」

フェリシアがまくし立てた瞬間、この部屋の誰でもない声が響く。光の加護を一身に受けた白金色の髪と月色の瞳をした青年は、いつの間にかクロウが投擲していた苦無を掴み取り、ぐるぐると手の中で回していた。

ふふん、と不敵に笑う青年はとても言葉では言い表せないほどの美貌の持ち主だ。彼の前では全てが震んで見える。影を作る睫毛は銀糸で、肩を流れる髪は金掛かった銀糸であり、光の洪水のよう。すっと伸びた鼻筋に瞳は神竜王グラニミュリンが愛した月色をしていた。

黙つていれば文句なしの美貌。ふわりと笑った顔は赤面しそうな威力がある。

しかしフェリシアはもう耐性がついているし、クロウはいつもの無表情。

だが彼がただ黙つているだけの青年ではないことはここにいる皆が知つていて。誰に対しても敬語ではあるが、皮肉屋で容赦の欠片もない。ある意味では神族というより魔族並に性格が悪いのだ。

「こんな物を投げられては危ないですよ。私でなければまず当たつていたでしょうね」

グラニミュリンの加護を受けた青年は笑みを湛えたまま、投擲された苦無をクロウに投げて寄越した。クロウは無言でそれを受け取ると長い袖の中に戻す。

ジユリアやローウェルと違い、彼はリュシアンをモ嫌いしている訳ではない。クロウの場合は条件反射のようなものだろう。

「よー、シアン。姫さんのここに来ると思つたぜ。その前に泡吹いて死ぬとこだつたけどな」

ひょっこり顔を出したソールはにこやかに笑つてリュシアンの隣に立つた。流石に泡を吹いて死ぬは言い過ぎだろうが、彼も本気でそうは思つていないのであつ。一ちらも神族らしからぬソールの軽口だ。

「大丈夫ですよ。生きてさえいれば私が浄化してあげますから」

「で、何の用？」

今まで黙っていたフェリシアだが、先ほどソールがやって来た時と同じ問いをリュシアンにする。その顔は非常に不機嫌そうだ。それは勿論、リュシアンのせいでもあり、認めたくはないが彼の訪問を期待していたフェリシア自身のせいでもあった。

「私があなたに、フェリシアに会うのに理由は必要ですか」

「必要って言つたら？」

「お分かりでしょ？ フェリシア。私は……」

フェリシアが仏頂面で尋ねれば、神族の青年は極上の笑みを浮かべて言葉を紡ぐ。その先を聞きたいやうな、聞きたくないやうな何とも言えない気持ちである。

それすらも彼の思惑のような気がして気に入らない。

「あー、はいはい。お一人さん。邪魔して悪いけど、クロちゃん怖いぜ？」

そんな二人の間に割つて入つたのは他でもないソールだった。いつものように軽い口調で、先ほどから一言も喋らないクロウを指す。だが彼の表情は全く変わらないように見える。それほど些細な変化だ。

「クロ……？」

クロウは普段から無表情で、感情の変化が読み取りづらい。些細すぎる変化だし、今も精々微妙に眉が上がっただけだ。フューリシアがクロウの名を呼ぶと、彼はふるふると首を横に振った。

「……別に怒つてない。でも、邪魔された」

「ああ、それは申し訳ありません。クロウさん。ほら、ソーも一緒に謝つて下さい。許して下さりますか？」

「ほそぼそと言つクロウにリュシアンは命点がいったように笑う。そしてソールの頭を無理矢理下げるに素直に謝つた。隣で痛い痛いと言つてもまるで聞いていない。

するとクロウは「く、と頷いた。どうやら許してくれたらしく。

「それもこれも、リュシアンとソールが湧いて出てくるから」

「いや、姫さん。いくら何でもそれは酷いぜ。俺らは「キーリカ何とか？」

大真面目に言い切るフューリシアに、ソールが細やかに抗議する。湧いて出て来るのはまるで虫ではないか。台所に発生する茶色の“あれ”じゃあるまいし。

「ソーハゴ ブリで十分ですよ」

しかしある意味ではこの人物も同族に容赦がない。満面の笑顔で言い切つたのだ。ソールなんてあの茶色生物で十分だと。

それでも神竜王グラントユーリンの眷属か。ソールは今でもたまに思う。目の前の美しい青年は、神族の皮を被つた魔族ではないのか

と。

「フェリシア様の授業を邪魔なさるとは良い度胸です。徹底的に叩き潰して差し上げますからそこに仲良く並びなさい。神族ども」

「剣の鍛にしてくれる……」

とその時、永久凍土より冷ややかな声が響く。現れたのは笑みを浮かべながら殺氣を撒き散らすジュリアと、既に剣を抜き放ったローウェル。特にジュリアはかなり怒っていた。

しかし頼みの綱であるはずのアリストイド、別名魔王城の良心とされる彼はここにはいない。

するとジュリアたちの後ろからじつそり現れたセエレが、フェリシアに近寄ろうとする。

「フェリシアや……」

「貴方は黙つて下さい」

「貴様は来るな」

「あなたはいりません」

何というか、愁傷様である。リュシアン、ローウェル、ジュリアの三人から容赦のない一発（三人なので正確には三発なのだが）を受けたセエレは、壁に叩きつけられ、幸せそうにのびていた。頭の上に星とハートが出そななくらい幸せそうな顔で。フェリシアの夢でも見ているのだろうか。

「こつもながらおつかないな」

「それよりソールは早く出て行つて」

おつかないのは分かるが、ソールが堂々と言えたことでもない。フェリシアからしてみればソールもソールで厄介なのだ。しかしながら何事も、思い通りにはいかないものである。

運命なんて信じない

「はあ、もう。まったく……」

ジュリア、ローウェル、リュシアンの三人はフェリシアなどそつちのけで遊んでいる（あくまでフェリシアから見て、だ）。セエレは打ち所でも悪かつたのか、一人の世界に入っているし、騒がしつたらありやしない。もうため息しか出でこないではないか。

「ね、へーか。アリス呼ばなくていいの？」

「いいの。今は忙しいんだから放つとくのが一番」

エクスカリバーンを頭に乗せ、のほほんと尋ねるフレディにフェリシアは呆れたように肩を竦める。いつの間にか入つて来たらしい。いつもの彼なら速攻で乱闘に加わりそそうだが、相手が相手なため、犬と遊ぶことにしたようだ。

ソールはと言えば、リュシアンを止める気すらないらしく、右手に顎を乗せ、三人を眺めていた。この乱闘騒ぎを止められるのはもはやアリストイドしかいない。

しかしながら、彼は忙しいのだ。これ以上、アリストイドの苦労を増やせないというフェリシアの配慮もある。触らぬ神に祟りなし、いや、この場合は神族と魔族だが。

「……つむとい」

「おー、クロちゃん今度こそ怒つちやつたぜ

クロウは、普段から声を荒らげるのも無ければ、怒ることだけではない。

しかしいつも平坦な声がほんの少しだけ怒りを含んでいた。ソールにリュシアンと一回も邪魔された上に、今度はこの乱鬪騒ぎだ。

仏の顔も三度まで。

しかしその発端となつたソールは、楽しそうに肩を揺らして笑っていた。クロウが滑らかで、それでいてどこまでも自然な動きで指を動かす。その瞬間、ぴたりと三人の動きが止まった。

彼の手から伸びているのは糸だ。それもよほど注視しなければ見えないほどの細い糸。しかもただの糸ではない。クロウが扱うそれは、鋼の糸、鋼糸とされるほどの切れ味を誇る特殊な糸。

本来なら体など簡単に切り裂けるようなものだが、クロウは牽制のつもりだ。本気になつていなくても、どの糸も寸でのところで止めている。

おまけにリュシアンをはじめとして、こんな事で怪我などするはずがない。

「ジユリア。いつものお茶をお願い。ローはセエレとフレディを連れて持ち場に戻つて。ソールはそここのリュシアンを連れて帰りなさい

フュリシアが声を発した瞬間、鋼糸がクロウの手から消え、三人も自由になる。ジユリアは敬愛する彼女ためにお茶の準備をし、ローウェルは一寧に頭を下げてフレディとセエレの首根っこを掴んで出でいった。

「なー、シアン。姫さんもああ言つてることだし、帰らうぜ

「帰るなら、ソーネ一人で帰つて下さい。私は私の意思でのみ動きます」

「なら、勝手にすれば？　でも邪魔だけはしないで」

凍えるような視線でソールを見た後、リュシアンはにこりと微笑んだ。相変わらず無駄な美貌である。これで口と性格が悪くなればまだ目の保養にはなったのに。と呟つのはジュリアの談だ。

「はい」

「え？　ちよ、ちよつと……」

邪魔だけはするなど言つたはずが、いつの間にカリュシアンがフェリシアの手を取つているではないか。当の本人は、力任せに振り払うことも出来ず、にいるフェリシアの様子を楽しんでいるように見える。

「フェリシア様、お待たせしました」

怒りを含んだ声と共に、テーブルにどん、と重い音を立ててティーポットが置かれた。勿論、ジュリアの仕業である。

普段の彼女なら、熱々の紅茶をリュシアンにぶつかkeしが、

“フェリシアのため”にいれたお茶では流石にしないらしい。

「あひ、あひちちちち！　何でシアンじやなくて俺にお湯かける訳、忠犬ちゃんー？」

ぽけー、と眺めていたソールはあまりの熱さに飛び上がった。

見ればフェリシアに用意したものとは違う、お湯が入ったポットを持つジュリア。つい先程までそのポットがソールに向けて傾けられていたのだ。

「忠犬とは人聞きが悪い。神族のお子様が偉そに。フェリシア様至上主義と言いなさい。それはそれは……あまりに存在感が薄くて気付かなかつたようで。そもそもこの忌々しい神族にお湯をかけても面白さなど皆無ですから」

非の付け所のない完璧な笑顔だが、見る者を凍り付かせる凄みがある。抜群のプロポーションに、落ち着いた美貌を持つジュリアからすればソールはそれこそ“お子様”なのだろう。しかし存在感が薄いとは酷い言われようだ。

「存在感薄いって……」

「薄い……」

無口で無表情のクロウにまで言われる始末だ。普段感情という感情を表さない少年が、少しあわれるような視線でソールを見つめているではないか。

「それは仕方ありません。事実です」

ジュリアとクロウの言葉にショックを受けたらしいソールに、リュシアンがにこやかに笑つてとどめの一言を放つ。

しかし、どさくさに紛れてフェリシアの手を取つているのだから彼も抜け目がない。

「いいから、リュシアン……！」

いいから手を離せと言つてもリュシアンは静かに笑つているだけだ。フェリシア専用のティーカップに紅茶を注ぎ終えたジュリアが、がしつとリュシアンの手を掴んで引き剥がした。

「そして貴方はフェリシア様の手を離しなさい」

「これは残念」

残念と言つながらも全く残念そろには見えない。完璧な微笑を浮かべるリュシアンは、悔しげでもなければジュリアに対して怒るといつこともなかつた。

受けたショックが大きいらしいソールはと言えば、フェリシアたちから背を向け、壁に向かつて、ビクセイビクセイ俺なんて、と呟いてくる。

「本当に恥々しい。後で塩でもまいて置きましょ」

「ビックリとかと言つて、あたしたちがまかれる方じや……」

早速塩を用意しそうな勢いのジュリアに、フェリシアが小走りつこみを入れる。魔族が塩をまくのもおかしな話だ。どちらかと言つて、こうより魔族は間違いなくまかれる方だろう。

だが彼女は大真面目だ。半分以上は本気なジュリアの言葉を聞いた料理長であり、魔王城の厨房を取り仕切る少年はぽつりと本音を呟いたのだった。

「塩……もつたいない」

そもそもリュシアンは何故、自分なんかに構うのだろう。それはここ一年、フェリシアが抱いていた疑問だった。

勿論、リュシアンに面と向かつて聞いたことはない。

いや、心のどこかで恐れていたのだろうか。彼の答えを。フェリシアは何も知らないのだ。リュシアンの本当の名も、年も。聞いたこともないし、別段気としたこともなかつた。

では今はどうだらう。気にならないか、と言われば気になる。それに、ソールはいつだつてリュシアンを迎えて来る。その理由はなんだ。

わざわざ迎えに来る“何か”があるのではないか。そう勘ぐらずにはいられない。

「どうしました？」

「何でも、ない……」

嘘だ。それでも咄嗟に口をついて出たのはそんな言葉だった。リュシアンが珍しく、案じるようになつてフェリシアを見つめている。ちなみにソールは相変わらず、壁に向かってぶつぶつ呴いているし、クロウは空気を読んで知らないふり。唯一邪魔をしそうなジュリアはフェリシアのために菓子を取りに行つていた。

フェリシアがリュシアンと一緒に（正確には二人ではないが）話すことは滅多にない。大体ジュリアが乱入してくるからだ。

フェリシア至上主義で、何よりも彼女を大切に思うジュリアはリュシアンが何よりも気に入らないらしい。

「フェリシア？」

「何でもないから……」

闇と光のように、魔族と神族は交わらない。それが絶対の理。運命だ。リュシアンの考えなんてフェリシアは知らない、分からない。すると、彼女の心を読んだかのようにリュシアンは極上の笑みを浮かべ、歌うように言った。

「それが“定め”ですから」

「定め？」

「ええ。あなたたち魔族わたしたちと神族が争う運命だと言つのなら、これもまた定められたこと」

まるで謎掛けのようだ。争いが運命だと言つのなら、自分たちの

出会いもまた運命だつたと言いたいのか。フエリシアはリュシアンの言葉に振り回されてばかり。

いつも余裕たっぷりな彼が腹立たしくて、悔しかった。

リュシアンに抱く“想い”は複雑過ぎてとても一言では言い表せない。いつだつて肝心な時は邪魔が入るのに、こんな時に限ってジユリアは戻つて来なかつた。

「あたしは……運命なんて信じない」

運命なんて不確かなものは信じない。だつてそつとでも言わなければ、一瞬でも心を傾けそつになつてしまふから。

魔族の王として許されない。何よりフエリシア自身が許さない。

「なら信じさせてさしあげます」

「リュシアン……？」

妖艶とも言える笑みを浮かべるリュシアン。ただ清く、美しいだけではない。その笑顔には抗い難い色香があつた。

彼は本当に神族なのだろうか。見慣れているはずの、フエリシアでさえ見入らずにはいられない。

初めて彼を目にした時、月光の化身のようだと思った。神竜王に、光に愛された者でありながら、彼の色彩は美しい月そのものであった。何よりも人目を引くのはその瞳。

どんな言葉を使ってもその美しさを完璧に表現することは出来ないだろう。星屑、いや、月色の瞳。それはきっと神竜王が流した涙。美しい、その一言でさえ陳腐に思えてしまう。

なら、信じさせてさしあげます。そう言つて笑うリュシアンはとても艶やかで。神族の清廉な美しさだけではなく、どこか危うい色香を含んだ笑みに見入られる。伸びて来た指が頬を掠めたかと思うと、そつと添えられた。

あたたかい。身に纏う色彩も、生まれ持つ力も違う魔族と神族。それなのに体温は同じなのだ。いや、リュシアンの方が少し冷たいかもしない。

「フュリシア……」

焦がれるようにに呼ばれた名に、フュリシアの体が震える。近づく端整な顔にぎゅっと目を瞑つた。逃げ出したいのに動けなくて、出来るのは目を瞑ることだけ。柔らかな感触が、唇が髪に触れたかと思えば、リュシアンは額、そして瞼に口付けを落とす。

唇が触れた箇所が燃えるように熱い。そつと優しく、触れるだけの口付けに何も考えられなくなる。

本当に嫌なら振り払えればいい。嫌だと叫べばいい。きっとリュアンは止めてくれるはずだ。あるいは魔術を使つたつて。

そう思うのに動けなかつた。心臓が早鐘のように脈打ち、頬に熱

が集まる。

フェリシアがきつく口を閉じていると、名残惜しむように唇が離れ、リュシアンの気配が遠くなる。恐る恐る口を開ければ、困ったように微笑む彼と目があった。

「続きはまた今度」

リュシアンは人差し指を唇に押し当てる微笑むと、後ろのソールを見やる。ジュリアに存在感が薄いと言われたのが相当ショックだったのだろう。未だにしゃがみ込んで、のの字を書いているではないか。リュシアンの視線には気づいてもいない。

「そこ」の神族、今すぐフェリシア様から離れなさい」

見入らずにはいられない笑みを浮かべて仁王立ちをしているのは勿論、ジュリアである。フェリシアのために菓子をみつくりつていたはずの彼女は、寒気がするほど怖い。ジュリアの周りだけ空気が凍ついているようだ。

「ソー、行きますよ。ではまた……」

リュシアンは素早くソールの首根っこを掴むと、瞬く間に姿を消した。見えなくなつた訳ではなく、本当に消えたのだ。フェリシアは頬を赤く染めて立ち去くしている。

この後、ジュリアは知らないふりをしていた（単に寝ていたとも）（つ）クロウの胸ぐらを掴んでゆすり、リュシアンがいた場所に塩をまいたのは言つまでもないだろう。

頭からまつ逆さまに落ちる直前、ソールは素早く空中で姿勢を変えて着地する。こきなじリュシアンに首根っこを掴まれたと思えばこれだ。

頭から落つばかり首の骨でも折つたらどうしてくれるのでいい。

「まつ逆さまに落ちたらそれはそれで愉快でしたが」

「は？ 何言つてんの、シャン？」

まつ逆さまに落ちる寸前でどうにか助かった友人に対して、それはないだろう。冗談ではなく、本気で残念だと笑つてゐるのだから。ここはまだ魔族の領内、といつか魔王城の城下である。リュシアンはソールを連れて城から転移した。そのまま帰ることだって出来たのに、これはわざわざ街を見て回る気だ。

リュシアンは適当にソールをあしらつと、普段は肩に流している髪を結い直し、背中に流す。最後に後ろについてあるフードを田深にかぶつて歩き出した。

神族の街ならまだしも、魔族の中で彼の白金色の髪と瞳は嫌でも目立つ。対照的にソールの闇色の髪と紫の瞳は魔族の色であるため隠す必要はない。

「なー、シャン。まだ帰らないのかよ」

「帰りたいならお一人でどうぞ。私はソールが居なくても全くもつて構いません」

なー、とリュシアンの服の裾を掴めば、返つて来たのは冷たい言葉と黒い微笑。確かに彼ならばソールなど必要ないだろ。例え魔族の国だろ、と、身の危険が及ぶことはそうないし、何より……。

いや、それでもここで引き下がつてなるものか。

「俺が構うの！ 怒られるの俺なんだぜ」

「それは気の毒に。日頃の行いが悪いせいですね」

さりりと言つてのけるリュシアンは流石だ。
神族のくせにどうしてここまで根性がひん曲がっているのか教えて欲しいものである。

「それはお前の、だろ？！」

「はいはい、そうですね！」

適当に答えながらリュシアンは人々の間を縫つて歩いて行く。王都であるため、通りを行き交う魔族たちは多く、活気に満ちている。威勢のよい声が飛び交い、楽しげに笑う彼らは神族や人と何ら変わらなかつた。

かなりの人混みであるため、人々がリュシアンに気付くことはない。

通りにはずらりと露店が並んでおり、新鮮な果実や野菜を売る店や手作りの雑貨を売る店など、実に様々だ。

足を止めることすらないリュシアンだったが、装飾品を売っている露店が気になつたらしい。露店に並ぶ品々な全て手作りの品であるらしい。しかしその腕は一見しただけで素晴らしいものだと分か

つた。

青いベルベットの布の上に広げられた装飾品。細工が施された指輪や見たこともない石が使われた首飾りに、アラベスク模様の金色の腕輪と実に様々だ。

どれもが素晴らしい、つい目移りしてしまう。同じものは一つとしてなく、全てが一点ものだ。そんな中からリュシアンはある物を手に取つた。

銀で作られた羽根飾りに孔雀色の石が嵌め込まれた髪飾り。フェリシアの瞳と同じ色をした石を見ていると、吸い込まれそうな錯覚に陥りそうだ。まるで彼女のためにあつらえたかのよう。

「すみません、これを頂けますか？」

「はいはい、これね。ん、お兄さん、旅の人？ や、安くしつくよ！」

リュシアンから髪飾りを受け取つた女主人は、彼のフードに隠された顔を見て頬を赤く染める。

顔（だけとも言つ）は良いリュシアンだ。にこりと微笑み掛けられれば、世のご婦人方は卒倒するに違いない。

「ありがとうございます」

礼を言つて笑い掛ければ案の定、女性は耳まで赤くしてリュシアンから視線を逸らした。

ちなみにソールはと言えばまた始まつたよ、とでも言つそつた表情で親友を見つめている。

「姫さんに何が買ったのか？」

「ええ。きっとよく似合います」

ええ、と頷いたリュシアンは本当に嬉しそうだ。普段から嫌味など言わず、そうしてくれればソールとしても非常に有難いのだが。フーリシアをからかうのも止めればいいのに、彼女を前にするとどうしてもからかいたくなるのだとか。

性格が悪いなど言おうものなら十倍返しである。その辺は結構な付き合いであるソールはちゃんと理解していた。触らぬ神には祟りなし、ならぬ性格悪いリュシアンはスルーするに越したことはない、である。

「ここまでその阿呆面を晒してるんですか。さあ、行きますよ」

「おい、シャン！ おいでくな！」

リュシアンは女主人に礼を言つと、リボンをかけてもらつた髪飾りを仕舞い、冷たくソールを一瞥した。そして彼の答えを聞く前に歩き出す。

気配を消しているのだろう。普段は嫌味なくらい目立つのに、彼の姿は既に人混みに紛れて見えなくなつていて。置いていかれてはまた自分がどうされるだろう。ソールは慌てて白金色の青年の後を追つたのだった。

ひひひでもなれ

「本当に恥々しい！　いいですね、陛下！　塩をまかせて頂きます！」

一瞬で厨房に行つて塩を取つて来たジュリアは、リュシアンとソールがいたところ（特にリュシアンがいた場所を重点的）に、これでもかと言うくらい塩をまきはじめた。お陰で床が塩まみれである。ちょっととした小山が出来ているくらいだ。綺麗好きなジュリアであるが、今はそれよりもリュシアンへの怒りの方が勝つているのだらう。

「あのー、ジュリア？　ジュリアちゃん」

「『お心ぐだれ』。ちゃんと消毒しますから」

「アリス、呼ぶ……」

フエリシアが呼びかけても、塩をまく手が止まることはない。とばつちりを受けて塩まみれになつたクロウがぼつりと呟いた。美人で非常に頼りになる彼女だが、リュシアンのこととなると人（というか魔族）が変わる。いつなつたジュリアを止められるのはアリストイドだけだ。

「陛下、少し宜しいでしょうか？　……ジュリア？」

いくつかの書類を手にやつて来たのはアリストイドで、せつせと塩をまくジュリアを見て目を丸くした。

部屋中が塩まみれでクロウは半分ほど塩を被つてゐる。フエリシ

アはもつお手上げだと言わんばかりに頭に手を当てていた。

「ああ、アリスト。どうかした？」

「……ジユリア。そのくらいで止めてください。陛下も呆れてらつしゃいますよ。クロウ様も塩まみれですし」

一旦塩を掴む手を止めたジユリアだが、自分の暴挙には気づいていないらしい。フェリシアを大切に思う気持ちは分かるのだが、このままでは部屋一面が塩の海になってしまつ。

アリストイドは、クロウの肩に積もつた塩を払いながらジユリアをたしなめる。

普段は控え目な彼だが、幼なじみであるジユリアにははつきりと物を言つ。長い付き合いであるからだろう。

「あら、私としたことが。申し訳ありません、フェリシア様。クロも大丈夫？」

「分かつてくれたなら、それでいいんだけど。掃除は必要かも」

苦笑するフェリシアと、アリストイドに塩を落として貰いながら頷くクロウ。フェリシアにとつてジユリアは優しくて頼りになつて、有能な姉のような存在だ。

しかしリュシアンが絡むと暴走するのだけは何とかならないのかと、本気で思つ今日この頃である。

「ではまず掃除ですね。申し訳ないですが、クロウ様の授業はその後で」

「……わかつた」

流石にこの塩の中では授業は出来まい。フェリシアとてこんな中で授業はごめんだ。
風など吹こうものなら口の中は間違いなく塩でジャリジャリである。

魔王と言つても一日中、執務に追われている訳ではない。そもそもそこでは到底もたないし、倒れてしまう。フェリシアはまだ魔王となつて日が浅く、アリストイドという補佐があつてこそ、魔王の勤めを果たせているのだ。

午後のお茶会はフェリシアの楽しみの一つである。魔王城の中にある秘密の庭園。そこは庭師の双子が彼女のためにだけに作り上げ

た庭。

白や薄紅、黄など色鮮やかな可愛らしい花が咲き、石畳が敷かれている。青々とした芝生は思わず寝転がりたくなるほどだ。

薦と花に彩られたアーチは、訪れる者を唸らせるだらつ。

花園の中央に置かれた真っ白のテーブルと椅子。テーブルクロスの上にはクッキーやマフィンが入ったバスケットがあつた。

フューリシアは椅子に座り、エヴァンジエリンとお茶を楽しんでいた。ジュリアはメイドらしく一人のために紅茶を用意している。今日はエヴァンジエリンの好きなミルクティーだ。

「ううむ……。やはりジュリアのいれる茶は美味じやのう」

「紅茶にかけては国一番ね」

ジュリアがいってくれたミルクティーを飲みながら、エヴァンジエリンはうつとりと目を細める。フューリシアもまことに香りを楽しんでから口をつけた。

富廷魔術士である彼女だが、大抵はこうして暇を潰していくことが多い。可憐な少女の姿をしていふとは言へ、エヴァンジエリンは偉大な大吸血鬼。

アルカード家の当主を退いた今は、富廷魔術士と言つても隠遁しているようなものだ。

「あらあら。そんなに誉めて頂いても何も出ませんよ」

そつは言つてもジュリアも満更ではないようで、やはり嬉しそうだ。

リュシアンが去つた今、やつと訪れた穏やかな時間である。セ

レに邪魔されることも無ければ、余計な邪魔が入ることもない。

ミルクティーを飲みながら、フェリシアはふと思いつく。リュシアンの唇の感触を。ジュリアが塩を撒き散らしたことですっかり忘れていたが、考え出すと止まらない。

思い出さないようにしたいのに逆効果だ。

フェリシアの異変に気付いたジュリアが、彼女の名を呼ぶ。

「フェリシア様？」

だがフェリシアはティーカップを持ったまま、固まっている。頬はうつすらと赤く染まり、孔雀色の瞳は僅かだが、熱にうかされたように潤んでいた。

「あ、えっと、その……何でもない！――」

ふと我に返ったフェリシアは動搖を誤魔化すようにティーカップを口元に運んだ。

しかし彼女の態度はどう見ても『何でもない』訳がなく、ジュリアにもエヴァンジエリンにもばれただつた。

フェリシアがここまで動搖するのはリュシアンのことには違いない。残念ながら一人ともフェリシアより一枚も一枚も上手である。

「陛下、いえ、フェリシイ様。隠さなくても分かります。あの性悪神族のことですね？」

「わらわに隠し事をしようなど五百年前早い」

すい、とフェリシアに詰め寄るジュリアと優雅にお茶を楽しむエヴァンジエリン。

勿論、一人には口が裂けても言えない、絶対に言えない。仕方なく、どうにかして誤魔化そうとするが、

「何というか具体的な年数で……」

「と言つことはやはり、リュシアン関連といつことか」

「あら? エヴァンジエリン様、分かりきつていたことでは?」

一人が猛烈に怖い。あまりの怖さに、フェリシアは無意識に椅子を後ろに動かした。なんというかリュシアンはわざと嫌われるような態度を取つてゐる。ジュリアやエヴァンジエリン、ローウェルには。

ただの気まぐれや、面白いから、という理由かもしれないが、何故だか疑問に思つたのだ。

「それくらいで許してあげて下さいよ」

「そうですよー。姫様がかわいそうです」

とその時、フェリシアには有難い助けが入つた。にこにこと笑つてゐるのは瓜二つと言つても過言ではない少年少女である。

少年の方は、短いリーフグリーンの髪に大地を思わせる茶の瞳。半袖のシャツに青いズボン。肘まである白い手袋は少し土で汚れていた。おまけに頭からは猫のような耳が生え、後ろには二つに別れた尻尾がある。

もう一人の少女も少年と同じ瞳の色に耳と尻尾まで。髪もリーフグリーンだが、彼より少し長く、耳の下辺りで左右とも三編みにしていた。

纏う服装は半袖のシャツに、これまた裾の部分がリボンで縛る形になつた青い半ズボン。少年とは少し違い、肘まであるレースの手袋をつけていた。

「リーフ、リース！」

『「きげんよう、陛下』』

思わぬ助つ人に、立ち上がつたフェリシアの声が弾む。彼女のためにこの庭を作り上げた庭師の双子は手を繋ぐと、膝を折り、優雅に礼をした。

「あの腹黒神族の肩を持つとでも？」

「まさか」

「ジュリア様、怖いですよー」

にこやかに、だが絶対零度の微笑みを向けるジュリアに怯むことなく笑みを浮かべる少年と少女。

男女の差異を除けば瓜二つの彼らは、まず双子なのだろう。

「ジュリアはフェリシアのこととなると必死じゃからな」

「当然です。本来ならお側に寄らせるものですか。思い出したら余計に腹が立つて来たというものの」

こんな時だけ“大人”なエヴァンジエリンに殺氣を撒き散らすジュリア。

しかし彼女はどこから見ても笑っていた。その美しいライトグリ

ーの瞳を除けば。

フューリシアはかわいた笑みを漏らす」としか出来ない。過激なメイド長には触れないのが一番だ。

「貴方たちもどう。今日は特別にいれてもいいわ」

『勿論、頂きます』

新しいティーセットの用意を始めたジュリアに、双子は迷うことなく頷いた。ジュリアの紅茶は絶品である。だがジュリアが怖いのはフューリシアの氣のせいだろうか。紅茶をいれていると言つより、魔女が怪しげな薬を調合する、の図にしか見えない。

「それにしても、最近は本当に賑やかになりましたね」

「リュシアン殿のお陰ですか?」

何気なく紡がれたリーフ(兄)の言葉に空氣を読まずに答えるリース(妹)。

途端、ティーポットを持つジュリアの手が震えた。これは非常にまずい。まずいが、どうすればいい。

「ふつむ……。本氣でアリスを連れて来るかの?」

「やつはつながらフュアが止めてよね

「知らん。それを言つながらフューリシアが止めれば良いだろ?」。と
「ぱつぱつぱつぱつめんじや」

皿に盛り付けられたクッキーを口に運び、のほほんと紅茶を啜るエヴァンジョン。そんな彼女の耳元でフェリシアが囁くが、面倒には関わりたくないらしい。

「ねえ、ジュリア。リュシアンのことなどどうでもいいから、気にしないで」

「フェリシア様がそう仰るのなら……」

仕方なくフェリシアは笑顔がひきつらなさをつけて、ジュリアに笑い掛ける。

どうにかなつたか、フェリシアが内心で胸を撫で下ろした瞬間、リースから余計な一言が。

「もう言えば今日はリュシアン殿、いらっしゃませんね」

あまりに高度なスキルを持つリースにリーフは頭を抱え、ジュリアは地の底から響くような笑い声を発している。

もうどうにでもなれ、そう思つたのはフェリシアもエヴァンジョンもきっと同じだらう。

大好きな人

己の体すら見えぬ深淵。深い闇の中に自分はいた。何も見えない、聞こえない。一切音のない世界は苦痛でしかなかつた。

それなのに時折、聞こえるのだ。頭の中に響く声。それは深く暗い、怨嗟の声だつた。

殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ！

誰を？何のために？そんな疑問など沸かなかつた。声に従えば楽になれる。そう信じて。

それからどれくらいの時が経つただろう。闇しかなかつた空間に一人の少女が現れたのは。

毛先の方だけ緩く波打つ髪は、優しい薄紅色で、こちらを見据える瞳は艶めく孔雀色。整った顔立ちをした可憐な少女。

ほつそりとした彼女の手が自分に伸びる。もし少女が敵意、あるいは殺意を持っているのなら、その手ごと食いつきつてやるつもりだった。

しかし、次に訪れたのは暴力でも魔術でもない。何を思ったのか、彼女はそつと自分の頭を撫でたのだ。

牙をむき殺氣を撒き散らす自分を恐ることなく。

「怖がらないで。もう大丈夫。誰も傷つけなくていい。さあ、『目を開けて』」

優しい声が自分を世界へと誘つた。視界がクリアになり、闇が晴れる。

もう自分をいましめるものはなく、どこへだつて飛んでいける。

忌まわしい鎌を絶ちきつてくれたのは、他でもない薄紅色の髪をした少女だった。

空を飛ぶのは好きだ。混じりけのない青く、美しい空と一緒になるような気がして。

頭上を鳥達が横切つて行つた。この姿が珍しいのか、興味津々といった様子はどこかかわいらしい。

澄み渡る蒼に映える銀とも紫とも言えぬ幻想的な生物。それは“

竜”だつた。

日差しを反射して煌めく藤色の鱗は光の加減によって銀色のようにも薄い紫にも見える。

猫のような縦長の瞳孔をした瞳は光を封じ込めた紫水晶。広げられた翼はまるで、星屑を集めたビロードのカーテンだ。

城を出て丁度三日になる。大好きな彼女は困つていのうか。眼下に見えるは彼女が守る街。黒塗りの城を中心として広がる街は活気に溢れていた。

遙か上空からそれを眺めていた竜は、瞳を閉じて体を丸める。刹那、淡い光に包まれたはずの竜はなく、背に煌めく皮膜の翼を持つ女性がいた。

見た目だけなら二十歳ほどだらうか。両肩が剥き出しになつた白衣装束に、長い袖は先に行くにつれて広がつてゐる。蝶を思わせる帯は彼女の瞳と同じ紫で、ゆつたりと波打つ白のスカートがひらひらと風に揺れた。

目的地は目の前。考えただけで心が踊る。彼女は迷うことなく、そして気持ちよさうに空を泳ぎ、大好きな“あの人”の元へと向かつた。

風に乗り、ゆつくりと翼を羽ばたかせる。いくつもある城の窓の一つ、最も高い場所にある窓まで来ると、彼女はこんこん、と硝子張りの窓を叩き、部屋の中の人物に自分の来訪を知らせた。それから数秒後、中から窓が開けられる。

「おかえり、ディオネ」

彼女を“ディオネ”と呼んだのはまだ十代半ばから後半ほどの少女

だつた。毛先だけ緩やかに波打つ長い髪は柔らかな薄紅色で、ディオネを見る孔雀色の瞳はどこまでも優しい。

ディオネは彼女が大好きだつた。彼女が、フェリシアが自分を暗闇から解き放つてくれたのだから。堪えきれなくなつたディオネはフェリシアの胸に飛び込んだ。

「ただいま、フェリシア！」

「わ！ ディ、ディオネ！ う、動けない……」

ダイブして来た自分より大きな相手を支えることなど、フェリシアが出来るはずもなく。一人はそのまま床に倒れこむ形になつた。一応女性の姿をしているとは言え、彼女は竜であるし竜の力は半端ない。いくら魔族で魔王であると言つてもフェリシアは腕つ節が強い訳ではないからだ。

ばたばたと足搔いても、ディオネは全く気づいていない。ぎゅつ、とフェリシアを抱き締めて頬擦りをしているではないか。まるで親鳥に甘える雛のようだ。

「フェリシア、フェリシア、聞いてくれ！ 空を飛ぶのは楽しいんだ！ フェリシアも一緒に飛ばないか？」

「それより、ディオネ。先に、退いて……」

苦しいどころの話ではない。窒息死しそうだ。消え入りそうな声を聞きとつたディオネは慌ててフェリシアを解放した。

どうにかディオネの手を借りて立ち上がつたものの、息も絶え絶えである。

「す、すまない……！ 怒つてないか？」

「怒つてない。でもちゃんと加減は考えて」

フエリシアは少し背伸びをしてディオネの頭を優しく撫でた。嬉しそうに目を細めたディオネは猫のよう。彼女の生い立ちを考えるとあまりきつくは言えない。

今でこそ天真爛漫な少女のようなディオネではあるが、彼女は魔族でも無ければ神族でもない。魔族と神族の血から作られた神魔とも呼べる存在である。

先代の魔王の時代の話だ。禁断の研究に手を出したある宮廷魔術士が城を追放された。その魔術士は魔王に激しい憎悪を募らせ、やがて一つの存在を作り出す。

それがある意味では魔族であり神族でもあり、そのどちらでもないディオネだった。

しかし魔術士はフエリシアとローウェルの手で捕縛され、彼女は魔術士の呪縛より解き放たれた。ディオネは自分の意思でフエリシアのそばにいることを選んだのである。

今でこそ女性の姿を取つてはいるが、本来ディオネには性別はない。魔王城に来たばかりの頃は不安だったためか、少年の姿をしていたくらいだ。

そんな訳で彼女には“女”としての自覚がない。これっぽっちもない。流石に誰彼構わず抱きつくことはしないが、慎みを教えるのは大変だ。特にジュリアが、だが。

「……もしかして、仕事の邪魔をしてしまったか？ すまない」

「全然邪魔じゃないから大丈夫。ちょうど休憩しようと思つたとこ

るだし。ジュリアがお茶を用意してくれてるから一緒に飲む?」

とフェリシアが言うと直ぐ様うん、と元気な声が返ってくる。ついつきまでしゅんとしていたのだが、それが彼女らしさなのだろう。休憩しようと思つていたのは本當だ。

ジュリアが氣をきかせてお茶とお菓子を用意している最中にディオネが帰つて来たのである。ジュリアならディオネの行動を先読みして、彼女の分まで準備しそうではあるが。

その直後、嬉しそうに笑つていたディオネの耳がぴくりと動く。

「む、むむ……」

「フェリシア様、あなたの愛の奴隸セエレが参り……ぐふうー。」

刹那、無駄に光を背負つてセエレが現れる。しかしながら彼がフェリシアの元にたどり着くことはなかつた。にこにこと笑つディオネに殴り倒されたからだ。ちなみに彼女に悪気は全くない。

「ディ、ディオネ。相変わらず良いパンチ……」

「おお、なんだ、セエレ。もつと遊ぼう」

はは、とかわいた笑みを浮かべるセエレの肩を掴んでガクガクと揺さぶるディオネ。何を勘違いしたのか、ディオネにとつて彼は殴つていいもの、になつているらしい。ディオネにしてみれば遊びでしかないのだろう。

しかしいくらセエレが頑丈でも竜の力で殴られれば当然痛い。リュシアンやディオネの一撃を受けて大怪我をしないのは、彼が氣の

扱いに長けているから。

人は魔術や神術は使えないが、代わりに体内や周囲の気を操る気術を使うことが出来る。

それによつて魔術や神術に似た効果を発生させているのだ。いくらセエレが頑丈と言つても彼は人間。気術を使って身体能力を強化しなければ、とても彼らの力に耐えられない。

ちなみにフェリシアはと言えばその隙にたまつた書類を片付けていた。

これ以上、アリストイドに迷惑を掛けたわけにはいかないし、特にディオネが帰つて来ると書類どころの話ではないのだ。

「う、ぬぬぬ……。これも愛の試練。フェリシア様を思えばこれくらい……！」

「なんだそれは。愛の試練？ 食べられるのか？」

全くもつて噛み合わない一人は以前としてじやれ合い？ を続けている。個性的な面々の適当なあしらい方を身につけなければとも仕事ははかどらない。

しばらくして戻つて来たジュリアに、ディオネとセエレは二つてり絞られたのだった。

ディオネはフェリシアが大好きだ。彼女が自分に名と光を与えてくれた人だから。彼女に出会わなければ、ディオネは本能のみに従う獣でしかなかつただろう。

頭の中に響く声だけに従い、人々を殺した。罪悪感など感じない。彼らを殺せば声が聞こえなくなるのだと信じていた。けれど、フェリシアから光と名を与えて初めて、ディオネは己の罪を知ることになる。魔術士に命じられるまま命を奪つた。何てことをしてしまつたのか。

それでもフェリシアは決してディオネを責めることはなかつた。魔王城にいることを許してくれた。居場所を与えてくれた。そんな彼女が大好きだ。彼女に仕える魔族たちも。ディオネが実験により産み出された竜であり、禁忌とされる存在であつても彼らは受け入れてくれた。

黙々と書類をこなすフェリシアをディオネは足を組み、太股の上で片肘をつくと、顎に手を添えて彼女を眺めている。ついさっきまでいたセエレはジュリアに追い出された。ディオネも邪魔をしないという条件つきでこの部屋にいる。

体を動かすことが好きなディオネにとって、本当はただ眺めているのは苦痛に近い。

しかしフェリシアは飽きないのだ。ずっと見ていたいと思う。神族でありながら彼女にご執心なリュシアンもそうなのだろうか。ジュリアが用意してくれたクッキーをつまみつつ、じつとフェリシアを眺める。書類に没頭しているのか、ディオネの視線にも気付いていないらしい。

「……誰か私と遊んでくれないのか」

しかしながら基本、退屈はディオネの天敵だ。フェリシアを見ているだけもいいのだが、彼女も書類に夢中で構つてくれない。ジュリアやアリストイドは当然忙しいだろうし、クロウも同様だ。

エヴァンジエリンは魔王城にいない上に、どうやら夫といちゃいちゃしているらしい。ローウェルはまずディオネとは遊ばないし、仕事がある。フレディも同様だ。

庭師の双子もそうだし、そうなればセエレか彼の愛犬ということになる。

しかしセエレはセエレでこちらに反撃してこないため、退屈と言えば退屈だ。何というかそれがセエレのポリシーらしい。

「むー……」

「……ディオネ。あたしのことはいいから、退屈なら街に出たら？」

顔を上げたフェリシアは、退屈そうにしていたディオネに気付いていたようだ。遊ぶ相手がないのなら、街に行つてもいいと言つてくれている。

神族でもありながら、藤色の髪に紫の瞳を持つディオネはまず魔族に見えるため問題はない。まあ、彼女を一人で放り出すのは色々と心配ではあるが。

「フェリシアといの方がいい」

退屈は確かにディオネの最大の敵ではあるが、折角帰つて来たのだから彼女のそばにいたい。

ディオネの居場所はフェリシアのそば以外考えられないのだから。遊び相手がいなくても我慢出来る。

「そう? 本当に?」

「フエリシアと一緒にいい!」

紫色の瞳を煌めかせ、満面の笑みを浮かべるティオネ。外見はフェリシアより年上だというのに、その言動は幼子のよう。

実際、彼女は生まれてから数年ほどで、子供と同じなのだ。ティオネのためにもそろそろ一段落をつけようとした時、銀色の光が視界をよぎった。

「ほんにほほ、フエリシア」

「ココ、ココシアン……」

陽光を弾く銀の髪、月色の瞳。神竜王グラントコリンに愛された者でありながら、月光の化身と呼ぶにふさわしい青年だった。

銀糸のような睫毛も、形の良い唇も。良い意味で現実味がない。一瞬にして現れたのは紛れもない神族の青年。何故だかフェリシアに興味を持つ彼は、そつとフエリシアの髪に触れた。

「よく似合います」

「するいだ。私にはお土産がないのか? リュシアン

「え?」

よく似合います、と微笑むリュシアンに唇を尖らせるティオネ。フェリシアには何が何だか分からない。

リュシアンはそんなフェリシアの言葉には答えず、勿論ティオネ

にありますよ、紙袋を彼女に手渡した。

「おお、フエリシアだ！」

「は？」

ディオネが取り出したのは、饅頭である。ただし、饅頭ではあるが、ただの饅頭ではない。ジユリアの一存（とは一概にも言えないが）で販売されている銘菓魔王饅頭である。

しかしながら、フエリシアにしてみれば自分の顔が目の前にあるのはあまりいいものではなかつた。

綺麗な薄紅色の饅頭はちょうど手のひらサイズで非常に可愛らしい。クロウが（ジユリアの半ば強制的なお願いで）製作を指揮しているだけある。味も言つまでもなく美味だ。

「その髪飾り、よく似合つてるな」

「でしょ？。ディオネも中々見る目がありますね」

饅頭を頬張りながら、うんうんと頷くディオネと、得意げに微笑むリュシアン。

壁に取り付けられた鏡を見ると、髪に輝く銀細工の蝶がとまつている。

孔雀色の石が嵌め込まれたそれは花にとまつた蝶そのもので、今にも飛び立ちそうだ。生き生きしているのに、纖細な羽根は触れれば壊れてしまいそう。儂くも美しい蝶そのもの。

「これ……」

「城下で見つけたんです。お気に召しましたか？」

フヨリシアは驚き、鏡を見つめている。リュシアンはと詰めれば、悪戯が成功した子供のよつた無邪氣な笑みを浮かべていた。

フヨリシアは魔王だ。贈り物なんて山ほど贈られたことがある。美しい宝石、高価なドレス、靴や首飾りだつて。

それでもリュシアンが自分のために選び、贈つてくれた髪飾りには敵はない。孔雀色の石はフヨリシアの瞳に合わせて選んでくれたのだろう。

今まで贈られたどんな宝石より輝いて見える。高価であるとか、そんなことは関係ない。それはきっとリュシアンが“自分のために”選んでくれたから。

「気に入りませんでしたか？」

「え、いや、その……ありがとつ、リュシアン」

表情を曇らせるリュシアンに、フヨリシアは慌てて首を振る。素直に礼を言つのは恥ずかしくて悔しいが、礼を言わるのは魔王として頂けない。無理矢理にでもそう思つことにしたが、それすらもリュシアンの思惑の内だとフヨリシアは知りもしないだろう。清廉潔白な神族とは思えない所業である。

一言も喋らないティオネはと言えば、饅頭を眺めつつ、口一杯に頬張つていた。何せ、お菓子には目がないティオネだ。大好物はクロウが作るプリンではあるが、饅頭もお気に召したらしい。

「それは良かった。おや、今日はジュリア殿はいらっしゃらないようですね」

「白々しい。気配を消しているからだろ？…………！」

わざとらしく周囲を見回し、くすりと微笑むリュシアン。本当に邪魔されたくないのなら、気配を消して来ればいい。リュシアンはいつだって、ジュリアたちに分かるようにわざと気配を消さずにやって来る。

「逢瀬には無粋でしょう?」

「なんだ、私は入つてないのか」

しつ、と形の良い唇に人差し指を当て、フェリシアの手を取るリュシアンにディオネからつっこみが入る。

彼にしてみれば饅頭を頬張るディオネなど、邪魔の内にも入つていないうらしい。

「い、いいから離せ……！ ち、近い近い……！」

「そんなに逃げなくともいいでしょう? 私を焦らすおつもりですか?」

じりじりと追い詰められていくフェリシア。顔を真っ赤に染めるフェリシアと艶やかな笑みを浮かべるリュシアン。どちらが優位かは言つまでもない。

ディオネが止めないのは、リュシアンを気に入っているからだし、フェリシアが本気で嫌がつていなかから。もし彼女が嫌がつていたなら、ディオネは殴つてでも止めている。

ディオネの目から見てもフェリシアは本氣で嫌がっているように見えなかつた。

口ではああ言つても、彼の事を嫌つてはいないからだし、彼女は意外に押しに弱い。リュシアンもそれを知つてゐるから、いつもああやつてゐるのだろう。

本当はディオネだつてリュシアンに大好きなフェリシアを取られるのは氣に入らない。

けれど、彼も好きだし、フェリシアの事を考へると下手なことは出来なかつた。

ディオネの頭の中は大体、お菓子と遊ぶこととフェリシアのことだけだが、ちゃんと考へてゐるのだ。

ジュリアが置いて行つてくれたお茶を自分で注ぎ、ずずつと音を立てて飲み干す。

「美味しい……。私はどうすればいいんだ……？」

右手に湯のみ、左手に饅頭を手にしたディオネは眉をハの字に歪めている。

普段は血相を変えてやつて来るジュリアも気づいていないようだし、気配に敏感なはずのローウェルやクロウも来ない。

魔王城に強固な結界を張つてゐるエヴァンジエリンもだ。もつとも彼女の場合は案外、知らぬふりをしているのかもしぬないが。

ディオネが思案していると、とん、と何かが壁にぶつかる音がした。フェリシアである。彼女は壁とリュシアンに挟まれる形になつてゐた。

白い頬は薔薇色に染まり、視線は宙を泳いでいるではないか。

「リュシアンも人が悪い。ん？　この場合は神族か？」

リュシアンがフェリシアを気に入っていることは分かる。フェリシアが彼を嫌つていないことも知つていて。

だがこのまま放つておいていいものか。いや、何だか嫌な気がした。果たしてどうしたものか。

「本当によく似合います。貴女は蝶のような人ですから、いつも私の手からすり抜けてしまう。どうすれば繋ぎ止めておけるか、是非教えて頂きたいのですね」

フェリシアの髪を撫でたリュシアンは、彼女の髪を一房とつて恭しく口づける。王子が姫君にするように。

洒落たことを堂々し、尚且つ悔しいくらいに似合つのは神族でもリュシアンくらいだらう。

フェリシアはそんな彼の手管にお手上げ状態なのか、目を回し、顔を赤くしてあつあつあつ……と眩っていた。

恥ずかしい言葉を素面で、さらりと言える彼に賞賛をおくりたい。流石にこれ以上はフェリシアがかわいそうだ。湯呑みを置き、饅頭を口一杯詰め込んで立ち上がろうとする。

しかしそんなディオネより早く、乱暴に扉が開け放たれた。

鬼の形相で飛び込んで来たのは勿論、ジュリアである。両手が塞がつてゐるため、どうやら蹴破つたらしい。吹き飛ばされた扉が無惨に床に倒れていた。

右手でフレディ、左手でソールの首根っこを掴んでいる彼女は、息一つ乱れていない。

普段は穏やかな光を宿す薄緑の瞳も今や怒りのせいか、剣呑な光を湛えている。

「フヨリシア様から離れなさい、今すぐ！」。それとお返しします

「言ひなり目を回しているソールをリュシアンに投げつけた。

どうやら彼女がここに来たのはリュシアンの気配を感じたからではなく、ソールが原因らしい。彼はいつもリュシアンを連れ戻しにやって来るのだから。どうせ一人して愚痴を言い合っていたところをジュリアに見つかったに違いない。

リュシアンは滑るようにフヨリシアの前に出ると、すつ、と右手を翳す。

すると、見えない壁に弾かれたようにソールの体が不自然に床に落ちる。びたん、と盛大な音を立てて。しかも顔面から。控え目に言つてもかなり痛そうだ。

「ティオネ！ 貴女は何をしていたの？」

「ジュリアも食べるか、饅頭。美味しいぞ？」

「食べません。貴女つて人は……」

ジュリアの怒りの矛先は、まずティオネに向いたらしい。すつかり餌付けされ、満面の笑みを浮かべるティオネにジュリアの頬がぴくぴくと動く。

笑っているのに田が笑っていない。思わず顔がひきつるティオネにジュリアは、田を回しているフレティを投げた。

「ぼーん、と宙を舞う少年。

「ティオネ、フレティとでも遊んで来なさい。さあ、早く

「うう……ジユ、ジユリア、ひどい」

「なんだフレティ。私と遊んでくれるのか。なり早へ行」

遊んで来なさい、その一言にティオネの紫の瞳が輝く。へろへろになつたフレティを連れて彼女は上機嫌で部屋を出て行つた。鼻歌を歌いながら、リュシアンのお土産である饅頭を頬張つて。

「そんなに睨まなくてすく離れますよ」

「あ……」

すぐせばにあつたリュシアンの体がフヨリシアから離れる。思わず口をついて出た声。これではまるで名残惜しいようではないか。そしてリュシアンがそれを見逃すはずがない。首を傾け、艶やかに笑う。

「寂しいですか？」

「寂しくない！」

きつ、と睨み付けるその顔でさえリュシアンを魅了して止まない。フェリシアはきっと知らないのだろう。自分がどれだけ他人から見られているか。

ジユリアはフヨリシアとリュシアンのやり取りに我慢の限界が来たらしい。彼女の迫力と言つたら、慣れているはずのフェリシアでさえ後退りするほどである。とは言え、リュシアンは平氣らしく、澄ました顔でジユリアを見返していた。

「貴方はよほど私を怒らせたいようですね」

「まさか。そんなことありませんよ」

見惚れそうな笑顔で睨み合つ一人。

まだ怒っている方がいい。下手に笑顔だからこそ恐ろしいのだ。流石のフェリシアも今のリュシアンとジュリアの間に割つて入ることは出来なかつた。

ちなみに二人の足元ではソールが俺の扱いつて酷いよね、と顔をひきつらせながら咳いていた。思いきり床に叩きつけられたせいか、彼の顔は真つ赤になつてゐる。

「私に喧嘩を売るなんていい度胸です。一度痛い目に合わなければ分からぬようですね」

「喧嘩を売るなんてとんでもない。出来ますか、貴女に?」

触れ合つのではないかと思わせるくらい顔を近づけ、笑い合つ、正しくは睨み合うジュリアとリュシアン。

フェリシアのこととなるとジュリアは周りが見えなくなる。リュシアンはそれを知つていて、わざと彼女を挑発しているのだ。貴女に出来ますか、と。

「ちょっと、ちょっとソール。何とかして」

フェリシアは倒れているソールを引きずつてしまがみこむと、そつと耳打ちする。何と言つてか自分のことで揉めているから、間に入りづらいのだ。

何とかして、とフェリシアが助けを求めるが、ソールは非常に嫌

そうな顔をした。

「無茶言つなよ、姫さん。死刑宣告に等しいぜ。あの二人が容赦すると思つのか？」

「思わないけど。半殺しで済むかなって」

「洒落にならないから！俺死ぬよ！？」

えへへ、とフェリシアが笑えばソールは一気に元気になったのか、勢い良く上体を起こした。

神族にはあり得ない紫水晶の瞳には紛れもない恐怖が見え隠れしている。とそこへ、アリストイドが息を切らせて飛び込んできた。蹴破られた扉と睨み合つ二人を見た彼は真つ青になる。

「ジュリア、また貴女は……」

「ご心配には及びません。アリストイド殿。起きなさい、ソー。残念ながら今回はジュリア殿と遊びに来た訳ではありません。私とソーハは神王陛下の使者として参りました」

そう言つリュシアンの表情は普段と変わらない。その声も。だからこそリュシアンの口から出た神王陛下の一言は酷く彼に不似合いだった。

神王陛下。とてもリュシアンの口から出たとは思えない名だった。権力や地位など、色々なしがらみとは対極にあると思っていたから。神王、文字通り神族を纏める王。リュシアンとソールが神王の使者だといつ。良い意味でも悪い意味でも神族らしからぬ二人が。

神王陛下の使者、その一言にアリストイドが目を伏せ、ジュリアは険しい顔になる。

「……どうぞ」と。

そんなつもりはないのに、こぼれ落ちた声は硬い。リュシアンがフェリシアに会いに来るのは神王のためなのだろうか。きっとそうに決まっている。

分かっていたはずなのに落胆している自分自身が一番嫌だった。神族が好んで魔族に近寄るはずがない。

そんなフェリシアの僅かな異変に気づいたジュリアはリュシアンを睨みつける。

「返答によつては貴方を許すわけには参りません。覚悟は出来ているのでしょうか？」

彼女にしては低い、魂まで凍りつくような冷たい声だった。フェリシアを何よりも大切にしているジュリアである。リュシアンの返答によつては何をしでかすか分からぬ。静かであるからこそ余計に。

薄縁の瞳は完全に据わつっていた。

「ジュリア、落ち着いて下さ……」

「私は十分落ち着いているわよ」

アリストイドが慌ててジュリアの前に立ちふさがるが、にべもなく返される。

彼女のあまりの迫力にソールは縮み上がり、顔をひきつらせていた。影が薄い、と言わたることがショックだったのだ。

「神王陛下の件とフェリシアのことは関係ありません。信じて頂け

ないでしょ、うが……」

「当たり前です。信じると言つ方が無理でしょ、う?」

リュシアンは今回のこととフエリシアのことは関係ないと呟く。しかしジュリアから返ってきたのは冷ややかな言葉だった。フエリシアはリュシアンの顔を見ることが出来ない。怖い、のだろうか。

「……分かりました。では本題に入りましょ、う。フエリシア、いいえ、魔王陛下。魔王陛下より賜つたお言葉をお伝えします」

小さく嘆息したリュシアンは真剣な表情になると、フエリシアの前で膝を折った。

フエリシアはそれをなんとも言えない気持ちで見下ろしている。何故こんなにも胸が痛いのだろう。裏切られたから?

そもそもフエリシアとリュシアンは、魔族と神族。裏切るも何もないではないか。

フエリシアの目には今の彼が知らない人物に見えて仕方なかつた。

魔王として

神出鬼没の神族。それがフェリシアが抱くリュシアンの印象だった。

何を考えているのか全く読めない変わり者。彼がジュリアやローウェルと互角以上にやり合っているは知っている。

神族でありながら、好戦的で口の悪い彼。

素性が気にならなかつた訳ではない。むしろ警戒すらしていた。なのにいつの間にかリュシアンはフェリシアの心の中にいたのだ。

怖かつたのかもしれない。知れば彼が自分の元から去ってしまう気がして。

フェリシアは魔王だ。神族一人に心を乱されるなんて許されない。未熟だから、では済まされないから。

息を吸い込み、意を決して口を開く。

「……その前に教えて。リュシアンは何者なの？」

「私は私ですよ」

普段と変わらぬ声で返された言葉。静かな笑みを湛えて彼は言った。

私は私？ リュシアンといつたすら、本当の名ではないくせに。心中で笑うフェリシアがいる。

「答えになつてない」

「“答え”ですよ。私は神族で、私以外の何者でもありません。勿論、貴女が望むなら何でもお答えしますが」

孔雀色の瞳を細め、睨み付けて来るフェリシアにリュシアンは妖しく笑う。

綺麗な顔だつて見慣れているはずなのに、落ち着かない。これもいつもの冗談だ。

その時、今まで黙つていたジュリアが一人の間に割つて入つた。

「それで早く神王陛下の用件を言いなさい。フェリシア様に触れることを許した訳ではありませんよ」

「ええ、分かっていますよ」

フェリシアに触れようとした彼の手を掴もつとしたジュリアだったが、寸でのところで避けられる。

それが彼女には気に入らない。忌々しいと言つていいだろう。リュシアンはジュリアがずっと大切にして来たフェリシアを奪おうとしているのだから。

「我ら神王陛下の居城をご存知ですか？」

「パレスですね」

「流石はアリストイード殿。その通りです」「

おずおずと口を開いたアリストイードにリュシアンはふわりと微笑む。

神王の居城。パレス、とは略称で、本来の名はライトパレス。古代アースヘルヴ語で光の宮殿という意味だ。

神王は一日中、パレスで神竜王に祈りを捧げているという。

何故なら彼ら神族は皆、神竜王に仕える聖職者のようなもの。中

でも神王はグラニミコリンの神子でもある。

しかも魔王や神王は基本、本来の名を口にする」とはない。つまりフエリシアたちは神王の性別はおろか、名さえ知らなかつた。

「それでそのパレスがどうしたつていつの?」

「貴女をパレスにお招きしたい。神王陛下はわかつ考へておられます。こちらが正式な書状です」

そう言つてリュシアンが取り出したのは、仰々しい簡に納められた一枚の紙。

金箔によつて飾られた紙には、流麗な字でリュシアンが口にしたことと概ね同じ事が綴られている。

神王の名に正式な印まで押されているではないか。リュシアンのたちの悪い冗談ではなく、この書状は本物だ。

「……一体どうしたことですか? 神王陛下は何を考へてらつしやるのです。それに不躾ではありませんか。フエリシア様にお会いしたいのなら、神王陛下が我が国に訪問されるのが筋というものでしょ?」

不信感を露にしたのは言つまでもなくジュリアである。

何故、神王がフエリシアをパレスに招きたいのか。顔を合わせたことすらないといつのに。

同じ立場であるはずなのに、神王がフエリシアを招くとはどうしたことなのか。

「そんなこと言われてもなあ、忠犬ちゃん。陛下は神族の地から出られないんだつて」

「そして私たち如きでは、神王陛下の御心を推し量ることなど出来ません」

若干怯えながらも首を竦めるソールに、秀麗な美貌を曇らせるリュシアン。つまり自分たちはあくまで使者であり、知りたいのなら直接会つて聞けということだらう。

しかしながら、魔族と神族の間にある溝は深い。大きな戦こそないが、小競り合いなら数え切れないほど起こっているのだ。魔族が神族を嫌っているように神族も魔族をよく思っていない。だというのにフェリシアを招きたいとはどんな思惑が絡んでいるのか。

あのアリストイドでさえ、険しい顔をしているほどだ。

「どうされますか、フェリシア？ 受けるか、それとも断るか。貴女の自由です」

自由とこいつとは断るのも出来るのだらう。普通に考えれば、フェリシアがパレスに赴く必要はない。

長らく争い、戦場以外で顔を合わせることもなかつた魔族の王と神族の王が相対する。

リュシアンや神王の真意がどこにあるのか、フェリシアには分からぬ。

だが今、魔王としてすべきことはなんだらう。

「正式な書状があるのなら、あたしに……私に断る理由はない。第二十四代魔王、フェリシア＝レグラメント＝ラインフォルトの名において、神王陛下の招待をお受けしよう」

「へ、陛下ー」

「それが陛下のお考へなら」

驚き、後ずさるるジユリアに、顔色は悪いながらも頭を垂れるアリストイド。

リュシアンは相変わらず微笑みを浮かべているし、ソールは口をあんぐりと開けていた。

平然としているのはフェリシアとリュシアンだけ。魔王がパレスに足を踏み入れたことは未だかつてない。ジユリアが呆然とするのも当然だ。

「「めんなさい、ジユリア。でもこれは正式な招待だし、魔王として行かないと。それにあたしはお飾りの王じゃない」

「「めんなさい、と謝つてジユリアを見据える。魔王としてまだ未熟であることは、フェリシア自身が痛感していること。フェリシアに不満を持つ貴族もそれなりにいる。

魔王とは名ばかりの魔力が高いだけの小娘だと。

確かにそうだ。皆の助けがなければ、とても魔王ではいられないのだろう。それでもフェリシアはお飾りの王でいるつもりなどなかつた。

今之内に好き勝手言わせておけばいい。

「……ジユリア」

「私だって分かっているのよ、アリスト……陛下の仰る通りです。申し訳ありません。メイド長失格ですね」

アリストイドが案じるようにジユリアを見る。彼が異を唱えなかつたのは、フェリシアの判断が正しいと感じていたから。ジユリアだって分かっている。否、分かつていていたつもりだつた。

全てフュリシアの言つ通り。

神王やリュシアンの思惑が何であるにせよ、正式な招待である以上は無下に断ることは出来ない。

フュリシアをお飾りだと笑う者もいる以上、国内の貴族にだつてなめられる訳にはいかないのだ。

ジュリアはそんな者たちからフュリシアを守らうと必死で、周りが見えていなかつたのかもしない。いつまでも小さなフュリシアではないのだ。彼女はジュリアが仕えるべき“王”。

「そんなこと言わないで。ジュリアがいてくれるから、あたしは頑張れるの」

「貴女はよくやつていらっしゃいますよ」

「フュリシィ様、ありがとうございます。……ですが、そこの神族。貴方に慰められたくはありません、余計なお世話です」

頃垂れるジュリアを励ましたのはフュリシアと、なんとリュシアンだった。途端に不機嫌になつた彼女はこつものよつに彼を睨み付ける。

するとリュシアンは、それでこそジュリア殿です、と肩を揺らして笑つた。

フェリシアとアリステイドを含めた九人の男女が、円卓を囲んで座っていた。

一見して高級そうな生地に金糸、銀糸の刺繡が施された衣装を身につけた彼らは明らかに貴族である。

黙つてフェリシアの話を聞いていた彼らだが、先に口を開いたのは二十歳ほどの青年である。

「なるほど。それが陛下のお考えなのですね」

肩に届くほどの薄紫の髪に、鮮やかな真紅の瞳。抜けるような白い肌に、金糸の縁取りがなされた黒の外套を纏っていた。

名はレックス・アルカード。その名は古の言葉で『王』を表す。現に彼は実質的な吸血鬼の王であり、惑のアルカード家現当主でエヴァンジエリンの実の息子である。

元老院。七大貴族から構成される王の助言機関。世襲制であり、代々七大貴族の当主がその任を引き継ぐ。エヴァンジエリンも当主であった頃はこの場にいたということだ。

七大貴族はフェリシアの実家である魔のレグラメント家を始め、智のファリエール、惑のアルカード、妖のクズノハ、幽のヨルハ、爪のウールヴヘジン、鱗のウイーヴィル、詠のフォニアが存在する。

「しかし危険ではありませんか?」

「詠よ、そなたの言つことはもつとも。神王の真意は分からぬ。だが陛下のお考えを尊重することが大事ではないか?」

表情を曇らせるのは、輝く金の髪と蒼海を思わせる蒼の瞳を持つた女性。

そんな彼女を安心させるように微笑んだのは、白雪の髪に黄金色の瞳、狐の耳をした女だった。それぞれ詠のフォニア、妖のクズノハの当主である。

フォニアの言葉を皮切りに皆、己の意見を口にし始めた。神王の招待を受けるか否かは元老院の中でも意見が分かれているようだ。

慎重を期すのは、フェリエール、ヨルハ、フォニアで、それ以外は概ねフェリシアの判断を尊重していた。

代々優秀な宰相を輩出しているファリエール、国の影である隠密を率いるヨルハが慎重なのは頷ける。

フォニアはそもそも、フェリシアが神王の招待を受けることに反対なのだろう。

「わたくしは陛下の判断に従うのがよろしいかと」

ゆつくりと、それでいてよく通る心地良い声で言つたのは、まだ若い女性だった。淡い緑の瞳に緩く波打つ薄紅色の髪は足元まで届く。

彼女が纏うのは襟ぐりが大きく開いた裾の長い黒のドレスで、小さな宝石がいくつも縫いつけられているのか、星屑を散りばめたように戻めている。

しかし何より驚くべきことは、彼女の容姿がフェリシアと瓜二つであったこと。正確には成長したであるが、フォニアに、だが。

「アルテミシア殿……」

「陛下の母君がそう仰るのならば、我らが反対するのも、おかしな話なのだろう」

フロステイブルーの髪をした壯年の男性が咳き、くすんだ灰色の髪に鋭い刃を思わせる銀色の瞳をした男が低い声で笑う。

複雑な表情を浮かべている彼は智のファリエール家当主、マティアス＝ファリエール。笑みを零した男は竜族の長であり、鱗のウイーヴィル家当主、ジークヴァルト＝ウイーヴィルである。

そしてアルテミシアと呼ばれた女性は魔のレグラメント家の当主、アルテミシア＝レグラメント。

可憐で、それでいて大人の色気を漂わせる彼女はフェリシアの実の母である。幼く体の弱い息子 フェリシアの弟に代わり、今も当主の座についていた。

「ジギスムント殿とシグレ殿は如何ですか？」

アルテミシアは先ほどから黙っている一人に声を掛ける。

暗い赤銅色の髪に、夕焼け雲を思わせる瞳をした二十代後半ほどの男は、狼の耳が頭の上に生えていた。人狼族の頂点に立つウールヴヘジン家。その当主シギスムント。

もう一人は恐らく二十代半ばほどに違いない。夜の闇を溶かしたような黒髪と黒曜石を碎いたように艶やかな瞳。僅かに尖った耳を持つ、鴉族。

影を司るヨルハの当主、シグレ＝ヨルハ。料理長であり、『影』を率いるクロウの甥でもある。

「ジークヴァルド殿と同意見だ」

「……元より我らヨルハは影。懸念は尽きないが、陛下の判断に従う」

「マティアス殿とエルフリー＝デ殿も宜しいですね？……我ら元老

院は陛下の判断に従います「

マティアスと詠のフォニアのエルフリー・デもアルテミシアの言葉に頷いた。フェリシアを陛下、と呼んではいるが、彼女が娘を見る瞳はとても優しい。

「では使者に正式な訪問の書状を。アリス、頼める?」

「お任せ下さい。それではこれにて閉会とします」

立ち上がったフェリシアは隣のアリストイドに視線を向ける。

押しが弱く、いつもジュリアの影に隠れがちなアリストイドだが本来は優秀な補佐だ。書類作成はお手の物だし、彼ならば上手くやつてくれるだろう。

使者は勿論、待たせてあるリュシアンとソール。あからさまに嫌そうな顔をするジュリアをフェリシアとアリストイドがどうにか説き伏せたのである。

当主たちは皆、フェリシアに一礼して出て行く中、アルテミシアだけがその場に残っていた。

「フェリシア。無理はしていない?」

「……あたしは大丈夫。母様こそ無理はしないで

フェリシアを案じるよう、彼女の手を取るアルテミシア。そんな母にフェリシアは、はにかむように笑って手を握り返した。

フェリシアら黒蝶族は高い魔力を持つ代わりに、体の弱い者が多い。

特に幼少時はそれが顕著で、幼くして命を落とす者も多かつた。フェリシアの弟もそうだ。

本来ならレグラメント家を継ぐ者でありながらも体が弱いため、当主をつとめることが出来ない。

その代わりにアルテミシアが当主の座についているのである。けれど、彼女とて決して体が丈夫とは言えないのだから無理は禁物だ。

「わたくしなら心配いらないわ。あなたこそ、本当に無理はないで。アリスがいてくれるとは言え、『魔王陛下』のお仕事は大変なのですから」

「母様……」

優しく微笑む母に、フヨリシアはそれ以上何も言えない。アルテミシアが心配するのも無理はないのだろう。

人の王とは違い、魔王は世襲制ではない。神族の王と同じく、神託によつて決定される。

魔力は歴代魔王の中でも随一とは言え、未だ魔族として未熟であるフェリシアを魔王にすることに、少なからず反対の声はあつた。しかし魔竜王ラインハルトの神託は絶対。逆らうことは出来ない。それでも彼女が魔王であることに不満を持つ貴族は確かにいるのだ。流石に表立つて非難するものはいないが、気にしてはいるだろう。娘をアルテミシアは心配している。

「まあ、それより、リュシアンさんとはつまくしているの？」

「は？」

「ここにこと笑うアルテミシアの口から出た思ひもよらぬ名にフェリシアが固まつた。

そんなフェリシアに母は、うふふと笑っているだけ。アリストイドは対照的な一人を交互に見つめて何故か慌てている。

「……誰が何と上手くいってるの？」

「だからリュシアンさんとあなたよ」

何を当たり前のことを、と言つように可愛らしく小首を傾げるアルテミシア。

端から見ればとても愛らしい仕草なのだろうが、今のフェリシアにはまったくもってそれは見えない。

「つまりいつてるも何も魔族と神族よ。魔王が神族とつまくいつてたら問題大有りじゃない」

期待に満ちた瞳で、こちらを見るアルテミシアから視線を逸らし、フェリシアは重いため息をついた。

つまりくも何も、フェリシアとリュシアンは魔族と神族である。おまけにフェリシアは魔王。

神族なんと上手くいつていたら魔王失格だ。しかもアルテミシアだって彼が神王の使者だと知っているのに、何を考えているのだろう。

娘であるフェリシアにもまったく考えが読めない。

考えが読めない一人

「大丈夫よ、フェリシア。愛の前に種族は関係ないの」

「ア、アルテミシア様……。それまでお願いします」

輝くばかりの笑顔で、とんでもないこと言われ、フェリシアもアリストイドも卒倒しそうになる。

こんな無邪気な女性がレグラメント家の当主だなんて、誰も気づかないだろう。とても二人の子供がいるようには見えない。

「ご機嫌いかがですか、アルテミシア殿」

「うげ」

突然聞こえたアリストイドではない男の声に、フェリシアはこれ以上ないくらい不機嫌そうな顔になる。

光を弾く白金色の髪、神秘的な月色の瞳。非の付け所がない美貌はフェリシアには嫌味にしか見えない。

口は悪いが『顔』だけはいいのだ。例え魔族であろうと、見入らずにはいられない。正に神竜王に愛された者。口さえ開かなければ完璧である。

もつとも、それが不可能であるのはフェリシアも知っているが。

「リュシアン様、貴方は一体どこから……。ジュリアに怒られますよ」

「それは申し訳ありません。当主の方々にご挨拶を、と思つたのですが、一足遅かつたようですね」

神出鬼没。その言葉が何よりも似合つ青年である。

怒り狂うジュリアを想像して青くなるアリストイドに謝つてはいるが、フエリシアには分かる。確信犯だ。リュシアンが無断で部屋を抜け出せば、ジュリアが怒るのは分かりきつてゐるのではないか。

「あらまあ、『ルーラ』。いつも娘がお世話をなつています

「いえいえ、こちらこちら

「なつてない！」

深々と頭を下げ合うアルテミシアとリュシアン。

思わず声を荒らげるフエリシアだが、アルテミシアが気にした様子はない。

何がお世話になつてゐる、だ。相手は仮にも神族で、フエリシアは魔王だといつてゐる。

「ああ、もう……。書状はアリストに用意してもらつから、もう少し待つて」

「ええ。いくらでも待たせて頂きますよ」

これ以上は話にならない。やつ話つたフエリシアはやつと話題を変えた。

まともに相手にしては「こちらが疲れるだけだし、リュシアンがここに来たのは、書状を催促する意味もあつたのではないか。そう思つたからだ。

しかしながら、彼の方が一枚どじろか一、二枚は上手であるが。

「貴女のためならば」

さらりと言われた一言に、フェリシアは咄嗟に返事をすることが出来ない。予想とは違った切り返しだ。何よりアルテミシアがいるからか、いつもの調子が出なかつた。

「あらあら、若いつていいわねえ」

「アルテミシア殿も十分お若いですよ」

フェリシアの気持ちを知つてか知らずか、ふわりと笑うアルテミシアと月色の瞳を細めて微笑むリュシアン。

性格は全く違う二人ではあるが、フェリシアからすればどちらも同じだ。考えと真意が読めない、という点では。

どうやらこの二人、気が合つらしい。魔族であるとか、神族であるとか、彼らには関係ないらしい。

近年、大きな戦は起こつていないとは言え、魔族と神族は本来なら相容れない存在だ。魔族と神族を作り出した魔竜王と神竜王が争つていたこともある。

「本当にリュシアンさんは上手いわね。奥さんにしてもらおうから?」

「貴女のような可憐な方にそう言つて頂けて光榮です」

そう言いつつも、リュシアンも満更でもないらしい。

アルテミシアの夫であり、フェリシアの父はフェリシアが幼い頃に他界している。母が変わらず父を愛していることは知つていた。

しかし、フェリシアが夫婦となつたりュシアンと母を想像してみると、卒倒どころの話ではなかつた。

「おー一人とも！　冗談はそれくらいにしてくださいー！　陛下が……」

「ふふふふ……。母様とリュシアンが……夫婦」

慌てるアリストイドの視線の先では、フェリシアが乾いた笑みを浮かべている。

彼女の孔雀色の瞳は何も映していない。そんなフェリシアを見たリュシアンは、憂いを帯びた表情で謝った。

「すみません、冗談が過ぎました。私はフェリシア一筋ですよ」

リュシアンはフェリシアの手を自らの両手で包み込む。

そして、それを目の前まで持つてみると、彼女の指に口付けた。降つてきた羽のような口付けに、フェリシアは呆然としている。アルテミシアはあらあらあら、と嬉しそうに笑っていた。アリストイドはと言つと、必死に辺りを見回しているではないか。ジュリアがいないか確かめているのだろう。

「だ、誰があたし一筋よ！　恥ずかしい」としないでー！」

「私はいつだって貴女を想っていますよ」

顔を真つ赤にして言つても、説得力など皆無だ。

直ぐ様リュシアンから離れたフェリシアは、魔力を編み上げる。しかし魔術が発動することはなかつた。膨れ上がつた魔力をリュシアンが苦もなく抑えていたからだ。

アリストイドはその様を見て、ただ驚愕するしかなかつた。

優雅に微笑む彼は全く疲れていない。本気ではないと言え、歴代魔王の中でも随一の魔力と謳われるフェリシアの魔力を抑えている。

……単純な力をもつて。

「リュシアン様、貴方は一体……」

「私は私に過ぎませんよ、アリストイド殿」

アリストイドの琥珀の瞳が微かに不安と驚きに揺れている。だが呆然と尋ねるアリストイドにも、リュシアンは僅かに笑つて答えただけだつた。

「やつと見つけました……！」

身も凍るような笑顔と共に現れたのは他でもないジュリアだつた。見入らずにはいられないほど凄絶な笑みだが、彼女のライトグリーンの瞳はまったくもつて笑つていない。ジュリアの視線はただ一人、リュシアンに向けられている。

「フレリシア、リュシアン！」

「ね？ だから言つたでしょ、ジュリア」

そんな彼女の後ろから顔を出したのはディオネとフレディ。ディオネの紫の瞳を煌めかせ、フレディは得意げに胸を張つていた。

「御機嫌よう、ジュリア。今日も大変そうね」

「お見苦しいところを……。失礼しました。……その神族。貴方を見つけられたのも、ディオネとフレディのお陰です。貴方ときたら力も気配も消しているんですからね」

ジュリアが纏う絶対零度の雰囲気を物ともせずに微笑むアルティニア。

そんな彼女にジュリアの雰囲気も和らぐが、それも一瞬。すぐに射殺さんばかりの視線をリュシアンに向けた。

どうやら今日は部屋を抜け出す際、リュシアンは完璧に力も気配も消していたのだろう。ジュリアが探つても分からなかつた。

そこでティオネとフレティの野生の勘の出番である。そして見事、彼を見つけたということらしい。

「えーっと、もしかして……」

「陛下の思つ通りです。神族の匂いを探し当てもうつたのです」

「なるほど。それは盲点でした」

勝ち誇つたように笑うジュリアに対し、リュシアンが悔しがつている様子はない。普段通り、穏やかな笑みを浮べているだけだ。おまけにはにかむティオネの頭を撫でているではないか。

「でも匂いつて……」

「お二人の嗅覚は優れていますから。ですが、ジュリア。これはいくらなんでもやり過ぎです。リュシアン様は正式な神王陛下の使者なのですよ」

フエリシアは何とも複雑な表情をするしかない。

アリストイドは真っ青になりながらも、ジュリアに苦笑を嗤する。表立つて彼女を注意出来るのは、彼とフエリシア、そしてクロウくらいだらう。

リュシアンがただの神族ならまだしも、今の彼は正式な神王の使者である。リュシアンや神王の考えが読めない以上、下手なことは出来ない。

もつとも、アリストイドが言わずともジュリアなら理解しているはずだ。

「ええ、そうね。でもそれとこれとは別。フヨリシア様に手を出す輩は許しません」

「手は出しませんよ。今はまだ、ね……」

含みのあるリュシアンの笑みに、ジュリアが激怒したのは言つまでもない。

ちなみに一人の喧嘩に参加したがつたティオネとフレティは勿論、フェリシアとアリストイドに止められたのだった。

リュシアンの考え方

リュシアンとソールのために用意された一室は、魔王城の中でも滅多に使われることのない貴賓室である。

水晶で作られたシャンデリアに、金糸の刺繡が施された真紅の絨毯。あつらえられた調度品は全てアンティークだ。

金の縁取りが施されたテーブルは艶を放っている。座り心地の良いソファーに腰掛けたソールは、緊張のあまりティーカップを持ったまま固まっていた。

「あのー……。もしもし?」

鋭い視線でソールを見下ろしているのは、銀色の髪を三つ編みにし、肩に流した人狼の青年。灰色掛けた青の瞳はまるで氷のよう。実際、彼にしてみれば神族のソールなど、セエレ以上に嫌われているのだろう。

「……なんだ?」

「……どうして俺がこんな目にあつてんす、かね?」

見上げる勇気はないので、並々と注がれた（自分で注いだともいいう）紅茶を凝視するしかない。

普段は敬語など全く使わないソールである。使おうとも思わないが、ローウェルを前にした時だけ意識しないと何故か敬語になるのだ。

「文句は勝手に抜け出した『あれ』に言え」

ローウェルは腕組みをし、両手を閉じている。

絶対零度の雰囲気を漂わせる彼に、ソールは本田何度田になるか分からぬため息をついた。

ローウェルの言つ彼、とは勿論リュシアンだ。

ソールも一応止めたのだが、元より話など聞かないリュシアンである。ジュリアがないのをいいことに、さつさと部屋を出ていったのだった。

「あのね、団長サン。監視なんかしなくても俺、勝手に出て行つたりしないよ」

勇気を振り絞つて顔を上げ、どうにか笑顔を作つてみせる。だがローウェルには効果がなかつたらしい。

彼の青の瞳に映るのは引きつた笑顔を浮かべる自分。ローウェルからすれば『ソール』はさぞ間抜けに見えているのだろう。しかしそんなソールの思いとは裏腹に、彼はほんの少しだけ笑っている。

「……お前を疑つてはいる訳ではない。こうでもしないと、陛下至上主義な誰かの気が済まないだけだ」

「そりや、『苦勞様なことで』

ローウェルの表情が緩んだのは一瞬。すぐまた氷刃のよつに研ぎ澄された美貌に戻り、ソールは思わず口を開ざした。

彼の周りだけ冰雪の嵐が吹き荒れているよつ。苦手なものがなさそうなソールも、この青年とジュリアだけは苦手なのだ。

ローウェルは先程同様、腕組みをしたまま手をとじている。

しかしながら、居心地が悪いことこの上ない。ソールは内心半泣きになりながら、出て行つたきり帰つて来ない青年に助けを求めた

のだった。

『早く、早く帰つて来てくれよ、シャンー。』

リュシアンは魔王城の屋根の先に立ち、城下を眺めていた。

魔王のお膝元であるこの街は、リュシアンの目から見ても活気に溢れている。

威勢の良い声が聞こえて来そうだ。民といつのは現金なもので、普通の生活が出来るなら、暴君ではない限り、王が誰であろうと構わない。

だが第一十四代魔王であるフーリシアは民たちからも慕われていた。

彼女が愛らしく容姿であることは勿論、歴代の王と比べて民たちのことを心から思つていてるからだね。

ジユリアやアリストイドの反対を押し切つて、よくティオネやフレティと城下に遊びに出でてゐるらしい。實にフーリシアらしいこと思う。

くすり、と笑みを漏らしたリュシアンは前を向いたまま、背後にいるであらう人物に話しかける。

「私に」用ですか？」

「……何を考えているのです？」

現れたのは黒のエプロンドレスを纏つた女性だった。

緩やかに波打つ金の髪、薄緑の瞳は怒りに満ちている。フェリシア至上主義者にして魔王城のメイド長、ジュリアだ。

リュシアンを睨みつける彼女は酷く不機嫌そうである。

しかし今のジュリアは普段の彼女と比べてあまりに静かすぎた。彼女はフェリシアが絡むと、良くも悪くも平静ではいられない。

「何を、と言いますと？」

「とほけても無駄です。この際、貴方が何者であろうと構いません。神王の使者であろうと何だろうと。ですがフェリシア様を悲しませることだけは許しません。フェリシア様はほんの僅かとは言え、貴方に心を許しているのですから」

リュシアンが首を傾げると、ジュリアは少し苛立つたように言葉を紡ぐ。今は少しばかり冷静らしい。

何だろ?構わない。そう口にした瞬間、僅かにリュシアンの月色の瞳が見開かれた。それも一瞬で、彼の変化にジュリアは気づかない。

「とほけてなぞいませんよ。それにしても一体、どういう風の吹き回しですか。しかし仮にも使者の前で陛下を敬称もつけずに呼ぶとは……。貴女も中々に怖い御人だ」

リュシアンは顎に手を当てて困ったように微笑する。それは彼女

が僅かばかりとは言え、リュシアンを認めていとこつこと。誰よりもフェリシアを大切に思う彼女が、リュシアンにすれば驚くべきことだ。

ただ、仮にも使者の前で神族の王に敬称も付けないとは、何を考えているのだろう。リュシアンが報告しないとでも思つてはいるのか、あるいは気にもしていないのか。

「何を言つてはいるのです。まつたく……白々しい。神王がどうだと言つのです。私の主はフェリシア様だけ。貴方や神王にどう思われよう構いません」

そう言つてのけるジュリアには恐れるものがないのだろうか。あるいはそれが魔族の矜持なのか。ジュリアが頭を垂れるのはただ一人。愛らしい魔王フェリシアだけ。

それまで笑みを浮かべていたリュシアンが、一転して真剣な表情になる。

「陛下の機嫌を損ねることにならうとも、ですか？」

「それならその程度の器だつたとこつことです」

リュシアンの問いににべもなく答えるジュリア。

たかが敬称程度で機嫌を損ねるような器が知れる。そんな王に敬意を払う必要はないと言いたいのだろうか。

するとどうだらう。しばしの沈黙の後、神族の青年は声を上げて笑つたのだ。

普段の彼は笑みを浮かべることはあつても、笑い声を漏らすことはない。それなのに、目の前の青年は本当におかしげに笑つていた。ジュリアも一瞬驚いたものの、直ぐに訝しげな顔になる。

「私を馬鹿にしているのですね」

「まさか。貴女の答えが面白くてつづいて……」

馬鹿にしているのか、と半眼で睨むジユリアに、まさかと首を振るリュシアン。

彼女を馬鹿にしている訳ではない。ただ、ジユリアの答えが予想外だったので、思わず笑つてしまつただけだ。ジユリアは馬鹿にされていると感じたのだろう。未だに不機嫌そな顔をしている。

「そんなに睨ますとも、馬鹿にしている訳ではありません。貴女の言つ通りですよ。その程度で機嫌を損ねるよりなら王として器が知れます」

「……一体どちらの味方なのです」

ジユリアにもリュシアンの考えが読めない。一年ほど前からふらりと魔王城に現れ始めた神族で、フェリシアを気に入つていて。顔はいいが口は悪い。相当な手練の上に、神龍王の加護を受けている。ジユリアが彼について知つていることなどその程度だ。

そして何故、リュシアンはこれほどまでに余裕があるのか。何に

対しても動じず、彼が驚いたところなど見たことがない。

リュシアンはそんなジユリアの考えを読んだように薄く笑つ。

「味方も何もありませんよ。ただ事実を述べただけです。……それと一つだけ。彼女を悲しませるのは私とて本意ではありません」

「何を……」

ジュリアが尋ねる前に、リュシアンの姿は忽然と消えていた。飛び降りた訳でもなく、幻であつたはずもない。彼は確かに“リュシアン”だった。

転移の術でも使つたのだろうか。もしかしたら、初めから自分を待つていたのかもしれない。

ジュリアは呆れたように嘆息すると、身を翻してぱつりと呟いた。

「嫌な奴……」

フヨリシアの望み

正式な書状を書くと言つても直ぐに出来る訳ではない。書状を書いたり、魔王がサインをする時に使われるペンやインクも普通のものではないのだ。

特殊な術が施されたもので、偽造できないようになつてゐる。光に透かせば文字が金色に光輝くのだった。

アリストイド専用の執務室は彼の性格同様、きちんと整頓されている。広々とした机の上には、彼の承認を待つ書類や民の意見書など様々なものが積まれていた。

それらの書類は全てアリストイド自身が見分してから、必要な分がフェリシアの元へと届けられる。

羽ペンを置き、椅子に深く背中を預けたその時だ。
目の前にティーカップが差し出された。白い陶器で出来たティーカップとソーサーはアリストイドのお気に入りのもの。

スノーフレークが描かれたそれは『彼女』が選んでくれたものだ。

「少し休憩にしたら？」

「……ありがとうございます」

ティーカップを受け取つて微笑み返す。アリストイドを見下ろしているのは勿論、幼なじみでありメイド長をつとめるジュリア。

ティーカップから湯気が立ち上り、良い香りがする。

彼女がいってくれた紅茶は絶品だ。アリストイドの好みを知つてゐるため、中身は言うまでもなくミルクティーだった。茶葉もミルクと相性がいいアッサムだろう。

お茶請けとしてシフォンケーキにホイップクリームが添えられて

いる。

アリストイドはティーカップを指の腹で撫で、ジュリアを見上げた。アリストイド以外が見れば普段と変わらない彼女だ。だがこれでも二人は幼なじみ。彼女の異変を見逃すほどアリストイドは鈍感ではない。

「そんな顔をしてどうしたんです？ またリュシアン様が何か仰つたのですか？」

「……やっぱりアリスはお見通しね」

アリストイドが尋ねると、ジュリアは敵わないといつ風に笑った。いつも強気な彼女であるが、唯一アリストイドの前では弱音を吐く。それは彼がジュリアにとつて気心が知れた相手であるからだろう。

「……私はただ、フェリシア様を悲しませたくないだけ。ねえ、アリス。私の考え、間違っているかしら？」

「いいえ。ジュリアが陛下を大事に思っていることは知っていますよ。ですが、陛下はもう小さな子供ではないのです。もしそれが陛下がお望みになつたことだとしても、貴女は同じことが言えますか？」

アリストイドはふわりと微笑み、そして憂いを帯びた顔でジュリアに問うた。

もしそれがフェリシアの望みだとしても、彼女は今と同じことが言えるだろうか。

フェリシアを大事に思つているのはジュリアだけではない。アリ

ステイドやクロウ、ローウェル、エヴァンジョンにリーフとリースの双子、ティオネやフレディだつてそつだ。一応は魔王城の住人であるセヒレも。

「……フェリシア様の望まれたことならば、私は何も言わないわ。だけど、あの神族だけは別」

「私は別にリュシアン様とは言つていませんが……」

銀のトレイを手にしたジュリアは、それを握り潰さんばかりの勢いで抱えている。そんな彼女をアリストイドは苦笑しながら見つめていた。

フェリシアへの思いが強すぎて暴走してしまつのは彼女の悪い癖だが、それは彼女を大切に思つていてることに他ならない。

それにアリストイドは何もリュシアンについて言つた訳ではなかつた。あくまでも例えだ。

「気にしないで。独り言だから。それよりも休憩にしましよう。アリスは放つておくと本当に休まないのだから」

「……それは耳が痛いです

ふふふ、と笑みを漏らす、ジュリアからアリストイドは視線を逸らす。

彼女の言う通り、一度仕事に没頭してしまえば他は何も目に入らない。時間を忘れて仕事をしているのがアリストイドの常である。ジュリアが気にかけていなければ食事はしないし、睡眠は取らないで大変なのだ。

ただ身奇麗にしているし、どんなに仕事をしても部屋が汚れることはないのだが。

やるべき仕事はどんなにやつても一向に無くなることはない。

それはそうだ。この国には多くの魔族たちが住んでいるのだし、彼らが起こすトラブルも一つや一つではない。

大抵は部下たちやローウェルたちが片付けてくれるのだが、手に負えない時はアリストイドに処理が回ってくることもある。

「……どう?」

「美味しい、ですよ。私も久しぶりにジュリアと料理をしたくて来ました」

ふわふわのシフォンケーキにクリームをつけて口に運ぶ。甘すぎないケーキと程よい甘さのクリームはとても美味しい。甘さのバランスがちゃんと取れているから、しつこいと感じないのだ。アリストイドは炊事や洗濯、掃除に裁縫などひと通りのことは熟せる。その中でも特に料理が好きで、昔はよくジュリアと一緒に作っていたものだ。

「今度フェリシア様に作つて差し上げましょ?。きっと喜んで下さるわ」

「……ええ、そうですね」

「」最近は政務に負われて趣味に割く時間がなかつたが、久々にジュリアと料理をするのもいいだろ。昔を思い出しながらアリストイドはフォークを置き、そつと微笑んだ。

大粒の水晶で作られたシャンテリア、敷かれた絨毯は金糸によつて薔薇の刺繡が施されている。まるで血のように赤いそれは、この屋敷に住む“彼女”的趣味だ。テーブルやソファーを始めとした家具や調度品は全てアンティーク。

一際大きな木製の柱時計は、室内に置かれたどんな物よりも古い。白い文字盤に黄金の短針が静かに時を刻んでいた。

臙脂色のソファーに腰掛けるのは一人の男性だ。年の頃は二十代半ばほどだろう。肩より僅かに長い髪は董を思わせる薄紫で、魔性を宿した瞳は最高級のルビー、ピジョン・ブラッドを思わせる。女性のように整つた、優しげな美貌をしているが、彼には隠し切れぬ色香がある。白い肌は白磁のようで染みすら見当たらなかつた。

彼は黒のスラックスを履き、レースで縁取られた白いシャツを纏つてゐる。胸もとで結ばれているのは赤のリボンタイだ。

羽織つた外套は夜の闇のようで、金糸、銀糸の刺繡は夜空に輝く星々のよう。

「おかえり。レックスはよくやつているようだね」

彼は入ってきた人物を見るなり、蕩けるよつな笑みを浮かべた。手を差し伸べると、その人物は彼の手をとつて微笑む。

こちらは十代半ばほどの少女である。愛らしいアンティークドールそのもので、緩やかに波打つ髪はルビー・レッド。

長い睫毛に縁取られた瞳は咲き誇る薔薇色をしていた。

「うむ。ただいま戻つた、ライ」

「そう、良かった」

少女 エヴァンジエリンを迎えた彼こそ、現当主レックスの父であり、彼女の夫であるライオネル・アルカードである。ライオネルは貴族であるが、婿養子でアルカード家の血を引いてはいない。見た目こそエヴァンジエリンの方が下ではあるが、実際は彼女より年下だ。

「いらっしゃいで、エヴァ」

ライオネルは座つたまま、そつとエヴァンジエリンを抱きしめる。髪を撫でられた彼女は心地よさそうに目を細めた。

ここに息子レックスがいれば呆れるところだが、彼はまだ魔王城である。よつて夫婦の時間を邪魔する者は誰もいない。

一見すると十代半ばの少女と二十代半ばの青年であるため、見様によつては危ない？光景だ。

しかし本人達は大真面目だし、実際はエヴァンジエリンの方が年上である。

「どうかした？ そんな浮かない顔をして」

暫くは心地よさげに目を細めていたエヴァンジエリンだが、彼女の様子が普段とは違うことにライオネルは気付いた。生命力溢れる薔薇色の瞳が不安げに揺れている。

今日は城で七大貴族の当主たちが集まつていたはず。だからこそアルカード家の当主であるレックスは不在なのだが。

一足先に城から帰つて来た彼女は少し沈んでいた。

「それが……以前話したリュシアンについて覚えておるか、ライ？」

「覚えているよ。陛下をいたく気に入っている神族の彼だね。でもそれが？」

“リュシアン”は一年ほど前から、フェリシアの前に現れ始めた神族の青年である。ライオネルもエヴァンジエリンからかなり曲者だと聞いたことがあった。

しかしその彼が彼女の憂いと何の関係があるのでどうか。

「あれは神王の使者だった。神王はフェリシアをパレスに招きたいといつての書状をあやつに託したのじゃ」

「神王陛下の……！」

神王。神竜王グラムミコリンの神子にして、神族の王。その性別も名すらも魔族たちは知らない。全てが謎に包まれている。

一年前からフェリシアの前に現れ始めたリュシアンと今回の書状。エヴァンジエリンでなくとも勘ぐらずにはいられない。

つまり彼女はこう言いたいのだろ？。彼がフェリシアの元を訪れていたのは神王の命ではないかと。

エヴァンジエリンがフェリシアを娘のように思つてるのはライオネルも知っていた。フェリシアはきっと傷つくだろう。表面上は平然としていても。

「わらわはフェリシアに傷ついて欲しくないのじゃ。ああは言つても、リュシアンのことを気に入つてゐるに違ひない。例え神王の命でなかつたとしても、一度沸いた疑念は消えぬ。今までのように接するには無理があら？」

「エヴァ……」

ライオネルは優しくエヴァンジェリンの髪を梳いた。

エヴァンジェリン＝アルカード。アルカード家の前当主であり、『鮮血を纏いし夜の女王』の名で呼ばれる大吸血鬼。

彼女が弱みを見せるのは夫であるライオネルの前でだけ。普段はその名に相応しい振る舞いをしているが、エヴァンジェリンも女性である。

例えリュシアンが本当にフェリシアを気に入つていて、自分の意思で彼女の元を訪れていたとしても、一度沸いた疑念は消えない。今までのように軽口を言こと合つことは出来ないだろう。

「だけど、陛下の答えは出ているんだよね？」

「ああ。フーリシアは神王の招待を受ける」

未だ魔王として未熟であれど、フーリシアは王の役目を理解している。どんな茨の道だとしても彼女は進むだろう。

どんなに「」が傷つき、血を流そうとも魔族のため、魔王として。

「エヴァも行くつもりだね？」

「退いたとは言え、これでもアルカード家前当主じやからの。わらわたち七大貴族は魔王を、フェリシアを補佐するために存在する」

問い合わせではあつたが、ライオネルもエヴァンジェリンの答えを予想していたのだね。確認に近い夫の問いに、エヴァンジェリンも頷く。

当主の座を息子であるレックスに譲った今も、アルカード家の者であることには変わりない。

勿論、エヴァンジエリン自身がフェリシアの力になりたい、という理由が一番だが。

七大貴族はこの国をおこした魔族たちの末裔。彼女らは魔王を補佐するために存在している。

「うん。君のそんな所がわたしは好きだよ。わたしは待つことしか出来ないけれど」

「……ライが待つていてくれるから、わらわはここに帰つて来れる。『鮮血を纏いし夜の女王』ではなく、エヴァンジエリンとして」

エヴァンジエリンはそつと自分の髪を撫でる手を取り、目を閉じて口づけた。

ライオネルが待つていてくれるから、帰る場所があるから強くあれる。彼と出会つたことでエヴァンジエリンは愛を知つたのだ。

「ならわたしも待つよ。君が帰る場所はわたしの元だから」

ライオネルもそんな彼女の髪や頬に口づける。もしこの場にレックスがいたのなら、そろそろ辟易していたことだろう。

一体何歳までいちゃいちゃするつもりだ、と。

勿論、言つて聞くような相手ではないことは、息子が一番良く分かつてゐるだろうが。

「ライ……」

「いいよ。おいで……」

エヴァンジエリンの薔薇色の瞳が蠱惑的に煌めく。

ライオネルの真紅の瞳とはまた違うが、その瞳は彼を魅力して止

まない。宝石のような、いや、宝石より美しい瞳に魅入られた。

ライオネルはそつとボタンを外し、首元を寬げる。露になつたのは白く、滑らかな肌。きめ細かい肌はまるで女性のよう。

エヴァンジエリンは答える代わりに妖艶に微笑むと、そつとその首筋に牙を立てた。

一人じゃない

アリステイドを待つている間、フェリシアは執務室に戻つて溜まつた書類を捌いていた。簡単に目を通して判子を押すだけのものから、民からの要望書など一度会議にかけなければならないものまで数えればきりがない。

そんな彼女の後ろには眠そうなクロウが控えている。ちなみにこれはジュリアが考えたもので、リュシアンホイホイと言つらしい。もし忌々しい神族の青年がフェリシアの邪魔をするようなら、クロウが実力で排除する仕組みになつていた。

眠そうに瞬きしている少年は、とても荒事に向かないように見える。ローウェルやフレティのよつに帶剣もしておらず、武器という武器も持たない。

ただ彼はこう見えて隠密を束ねる長であり、幽のヨルハ一族に連なる者。暗器使いであるクロウは、ありとあらゆる場所に武器を隠し持つているのだ。

いざとなれば、顔色一つ変えず邪魔者を排除するだひつ。

「あ、ハエ……」

瞬間、クロウが動く。今まで眠そうにしていたとは思えない凄まじい速さだ。ただ相変わらず藍色の瞳は半ばまでしか開いていないが。

だがフェリシアにすれば問題はそこではない。

「……クロ」

羽根ペンを持つフェリシアの手が震える。振り向いた彼女の笑顔

はひきつっていた。何故なら、執務用の机に深々と苦無が突き刺さつて いるからだ。

幸い書類は無事だが、勘弁して欲しい。ちなみにハエは勿論、ご愁傷様である。

「フェリシアの邪魔、した……」

「いや、危ないからね！ もつと穩便に。クロウが作った殺虫剤で……！」

全く悪びれる様子はないが、ハエなど邪魔の内にも入らない。その度に武器が飛んで来ると思えばとても集中出来ないではないか。クロウなら間違つても自分を傷つけることはないだろうが、心臓に悪すぎると。

苦無を投擲するより、殺虫剤という素敵アイテムがあるので、ジュリアがフェリシアのためだけに編み出した（製作はクロウだが）、どんな虫でもイチコロ君。古今東西ありとあらゆる毒が詰め込まれた、といふことではない、残念ながら。

「あれ……使う前に……術使わないと、死ぬ」

「ちよつ、ええ！？ そんな危ない代物だったの！？ 効果を追求し過ぎだって！」

大真面目に、しかもさらりと言つてのけるクロウ。

フェリシアは思わず机を叩いて立ち上がった。今まで一度も使つたことはなかつたが、何かの拍子で使いでもしたら、本当に洒落にならない。

あらゆる毒に耐性のあるクロウとは違い、こちちは間違いなくイチコロではないか。

「追求……大事」

「大事だけど、ものには限度つてものが……はあ」

何故か胸を張つて言うクロウに、フェリシアはため息しか出でしない。殺虫剤の効果を高めるのは悪いことではないだろ。しかしものには限度というものがある。これでは殺虫剤ではなく、殺人剤ではないか。実に笑えない。

「とりあえずこれ、抜いてくれる?」

田の前に突き刺さつた苦無は、どうやつてもフェリシアの視界に入る。このままではとても書類を捌く気にはなれないし、何より居心地が悪い。非常に悪い。

無言で頷いたクロウは、深々と突き刺さつた刃を苦もなく引き抜き、袖に仕舞つた。当然のことながら、執務用の机にはしつかり跡がついている。

普通なら流石のフェリシアも怒るところなのだが、相手はクロウ。彼に悪気がないことは分かつていた。

気を取りなおして羽ペンを持ち、書類に目をやる。

けれど、とても手をつける気にはなれなかつた。リュシアンのことが頭から離れない。書類を捌いている間も、考えなによくにしても無駄だつた。

何故、どうして。答えは出ない。

信じるつもりなんてなかつたのに。いつの間にかフェリシアの中でリュシアンという存在が大きくなつていた。

信じれば裏切られる。分かつていた、理解していたつもりだつた。彼の言葉は全て嘘。そう思えるのならどんなに楽か。

フエリシアはそつと引き出しを開け、中にあつた髪飾りに触れる。自分の瞳と同じ孔雀色の石がはめ込まれた髪飾り。銀で作られたそれは、今にも羽根を広げて飛び立つように見えた。

リュシアンからの贈り物。認めたくはなかつたが、嬉しかつた。

「ねえ、クロ。リュシアンは……」

口を開きかけて止める。今は何を言つても意味が無い。それにクロウに言つた所で彼が困るだけだらう。

沈黙するフエリシアの頭をそつと撫でたのはクロウだった。弾かけるように顔を上げ、クロウを見つめる。

「大丈夫……。フエリシア、ひとり……じゃない」

「クロ……」

クロウの表情は普段と変わらない。いつもと同じように眠そうに瞬きをしている。

昔、頭を撫でてくれた母の手を思い出した。あたたかくて優しい手。

「ありがとう。うん。一人じゃない、か」

ありがとう。礼を言いながらフエリシアは胸が熱くなるのを感じた。一人じゃない。その言葉が何よりも嬉しかつた。

いつまでも悩んでいる訳にはいかない。フエリシアもそれは重々承知していた。なるべくリュシアンについて考えず、無心で書類を捌いていく。

こんな時に限つてセエレもディオネもフレティですらやつて来ない。いつもは嫌だと言つても乱入してくるというのに。ジユリアに

釘を刺されたのだろうか。

室内にはフエリシアが羽ペンを走らせる音だけが響いている。

クロウは影のように佇み、微動だにしない。瞬きをしているため、起きてはいるのだろうが……。

「フエリシア」

血らの名を呼ぶ声に反射的に声を上げる。するとヤニには今一番会いたくない相手がいた。

煌く白金色の髪、仄かな光を放つ月色の瞳。何もかもが光を宿している。こんな時でさえ綺麗だと思うのは、きっとおかしいのだろう。

フエリシアが言葉を発する前に、いつの間に移動したのかクロウが苦無をリュシアンの首元に突きつけていた。

それでも彼は驚くどころか微笑を浮かべているではないか。クロウはいつもと変わらぬ無表情で、何を考えているのかいまいちよく分からぬ。

ただジユリアの言いつけをちゃんと守っているのだろう。

クロウ自身はリュシアンを嫌つてはいないだろうし、むしろ彼の中では気に入っているに違いない。

「クロウさん。私は少しだけ彼女と話がしたいだけです。これで手を打つては頂けませんか？ アルフエミア。神族の土地でしか咲かない花から特別に生成した毒です」

「どこか胡散臭い笑みを浮かべて、リュシアンが取り出したのは、手のひらより小さな硝子の小瓶。中には董色の液体が揺れている。彼の言葉によると、董色の液体は毒だとか。神族の土地でしか咲かない花らしく、フエリシアも聞いたことがない。」

けれど毒マニアであるクロウには本物と偽物の違いも分かるだろ

う。フエリシアがそつと覗き込んでみると、少年の藍色の瞳は珍しく煌めいていた。

親しい者でなければ分からぬほど些細な変化だが、どうやら本物の毒らしい。おまけにクロウがここまで感情を露にするほど手に入れたい毒、だ。

「賄賂……！」

「賄賂などとんでもない。これは私の好意、言つなれば心づけです
よ」

フエリシアが指をさして叫んでも、リュシアンはくすぐすと笑うだけ。彼が目の前で小瓶を揺らせば、クロウは直ぐ様それを掴み、袖の中に放り込んだ。

そして自分は部屋の隅に立つて扉を閉じる。知らん振りをしているからわざと済ませ、だらうか。

「そして懐柔されるのはやつ……」

こぐら向でも早すぎる。一瞬ではないか。アルフエニアなる花の毒がどれほど貴重か知らないが、尋常ではない変わり身の早さだ。クロウはと叫えばかなり満悦らしい。

すれ違う思い

フェリシアからリュシアンに話すことなど何もない。何を言えばいいかなんて分からないし、口を開けば、彼を責めてしまいそうだった。

責めるも何も、彼は自分がすべきことをただけだ。リュシアンは神王の使者なのだから。

何も言わないフェリシアを見て、リュシアンは笑う。その笑みが少しだけ悲しげに見えたのはきっと、気のせいだ。

「信じて欲しい、とは言いません。私が貴女に嘘をついていたのは事実です。そして今も……」

リュシアンは謝罪も言い訳もしなかった。それ故にフェリシアの心は痛む。すみません、と謝ってくれたなら、まだ良かつた。あるいは言い訳をしてくれたら。

だが彼は一切、言い訳も謝罪もしなかつた。はぐらかす訳でもない。はつきりと嘘をついていた。

ほらみたことか、心の中でもう一人のフェリシアがせせら笑う。結局、彼は何も自分に本当のことを教えなかつた。

俯き、拳を震わせるフェリシア。どうしてこんなにも痛いのだろう。

分からぬ、分かりたくない。無言を貫くフェリシアに、リュシアンは言葉を続ける。

「私はただ、貴女に私たちの国を見て欲しかつた。魔族と神族、住む民こそ違えど、この国も我が國も“同じ”です。神族だって、善い者も悪い者もいます。……一方的に理解して貰おうなんて、都合が良すぎますね。それでは私はこれで。クロウさん、ありがとうございます」

ざこました」

扉が閉まる音がするまで、フェリシアは指一本動かせなかつた。リュシアンの気配が遠ざかるのを確認して、息を吐く。

リュシアンはただ、自分たちの国をフェリシアに見て欲しかつたといつ。

フェリシアは神族の土地に行つたこともなれば、目にしたこともない。知識として頭の中にあるが、百聞は一見にしかず、という言葉もあるほどだ。

リュシアンはこんなことを言つたために、わざわざ自分を訪ねたのだろうか。

クロウが心配そうにフェリシアを見下ろしているが、それどころではなかつた。様々な想いが浮かんでは消える。

「……どうして、言い訳の一つもしないの。いつもなら笑つて誤魔化すのに……！ こんな時だけ、何も言わない……」

いつそ全て嘘だつたと言つてくれれば、どれほど楽だつたか。そうすれば罵ることが出来たのに。

痛くて痛くて堪らない。自分は魔王なのだ。

だから常に強くあらなければならぬ。弱みを見せてはならない。なのに、心はいつまで経つても乱れたままだつた。

人狼族の青年の気配が遠ざかるのを確認して、ソールは深いため

息をついた。

熱かつたはずの紅茶はいつの間にか冷めており、その事からもソールの緊張ぶりが窺い知れる。針のむしろ状態で頑張った自分を褒め称えたいくらいだ。

捨てるのも勿体無いため、（ソールはこう見えて律儀である）すっかり冷えきった液体を飲み干し、用意されていた焼き菓子を口に放り込んだ。

すつきりとした甘さが口内に広がる。香ばしく、さくさくした食感は流石といふところか。

魔王城の貴賓室はパレスと比べ、全体的に華やかで豪華である。そもそも神族は僕約家であり、贅沢をするという観念自体が少ない。神王の居城ということで、パレスはどちらかと言つと派手な宮殿ではあるが、魔王城には敵わないだろう。

扉が開く音にソールはカツプをソーサーに乗せ、再び深い溜息をつく。

全ては彼が悪いのだ。半ばヤケ気味に足を組み、背後にはいる人物を睨みつけた。

「おい、シアン。お前が帰つて来ないから、えらい目に会わされただろ？」「あの団長さん、ホントに怖いんだからな！」

「私のせいにしないで下さい。自業自得でしょう」

泣きそうになつてゐるソールを冷たく一瞥し、リュシアンは彼に向かい側にあるソファーに腰掛ける。一人は神族であるが、一応客人であるため、貴賓室なのだろう。

普段は使われることのないこの部屋も、掃除は隅まで行き届いていた。その辺りは流石ジュリア。一切手抜きはない。

例えこの部屋に滞在するのが神族であつても、彼女は決して手を

抜かないだろ？。

「それ、お前にだけは言われたくないんだけどな。……それはそうと、ホントに良かったのか？ 正直、姫さん見てられなかつたぜ」

「……これでいいんです。どの道、彼女を騙していることに変わりはないんですから。『私』はフェリシアを傷つけてしまつ。私は彼女に関わるべきではなかつたのかもしません」

自分たちが神王の使者だと告げた時、フェリシアは明らかに動搖していた。

全て彼が選んだこと。ソールもとやかく言つつもりはなかつたが、彼女を見て、どうしても言わざにはいられなかつたのだ。

良かつたのか、と問うソールにリュシアンは笑う。

返つて来た言葉は普段の彼からは想像出来ない程、弱々しいものだつた。

何にしても自分が彼女を騙していることに変わりない。自分という存在がフェリシアを傷つけると。嘘を重ねた先に待つものとは何だろう。

そんなリュシアンにソールは掛けた言葉を見つけられずにいた。どんな言葉でさえ、彼の心を覆う暗雲を払うことなど出来ないと分かっていたから。

ローウェルは非常に不機嫌だった。

廊下を歩く彼は殺氣を撒き散らしており、すれ違う全ての者たちが彼に道を譲る。その理由は言わずもがなリュシアン。

それはローウェル自身も理解していたが、何に腹が立っているかと言われば、それはやはりフェリシアへの態度だ。

今まで一目置く、まではいかないが多少なりとも認めていたる部分もあった。

それなのに彼は神王の使者だという。フェリシアに近付いたのもそれが理由か。ローウェルがいくら問い合わせても彼は何も言わないだろう。薄く笑っているだけで。

実に気に入らない。あのリュシアンという男。神族であることは勿論、フェリシアが気にかけているというところも。

フェリシアは妹のような存在だ。可愛くて仕方がない。ジュリアほどではないが、彼女には幸せになつて欲しいと思う。

そんな不機嫌オーラを全身から漂わせるローウェルに近づく人物が一人。

『彼女』は眉間に皺を寄せている彼など気にせず満面の笑みを浮かべ、ローウェルの前に立つた。

「ロー、どうしたんだ？ みんなが怯えているぞ」

艶めく藤色の髪に、紫水晶よりも美しい瞳。整った容貌の若い女性で、ローウェルと同年代だろうか。ただ呆れたような表情や声音は、女性というより少女のよう。

現に彼女 ディオネは実験により生み出された存在で、外見と中身は必ずしも一致しない。

「そりゃ

「そ、うか、じ、や、ない、だ、ろ、う。あ、ま、り、皆、に、心、配、を、掛、け、て、は、駄、目、だ。フ、エ、リ、シ、ア、が、心、配、な、の、は、分、か、る、が、も、う、少、し、ど、う、に、か、な、ら、い、か、?」
こ、の、ま、ま、で、は、死、人、が、出、る、ぞ、?」

素つ氣ない答えを返すローウェルは、ディオネの顔すら見ていない
かつた。フェリシアが心配なのはよく分かる。

しかしこれではあまりに使用人や騎士たちが不憫でならない。
毅然とした態度を取るディオネに、騎士たちが心の中で声援を送
つたとか、送らないとか。

今のローウェルはまるで永久凍土のよう。彼が通った場所から凍
りつくようだ。そんな意味での“死人”発言だろう。

「以後氣をつける。……フレディ、今すぐ騎士たちを集めろ。訓練
だ」

ディオネを一瞥したローウェルは、背後で固まっていたフレディ
に目を向けた。少年の硬直がとける。命令されたフレディは文句一
つ言わず、弾かれたように駆け出した。

「相変わらず人が悪いな、ローは」

「俺は人ではなく魔族だ」

苦笑するディオネに対し、ローウェルは表情一つ変えず、歩き出
したのだった。

魔族たちが慌ただしく走りまわる中、セエレは取り残されたような気がしていた。

フェリシアには到底近づけないし、アリストイドも同様だ。ジュリアは色んな意味で怖すぎるし、クロウは姿が見えない。

先ほど、一瞬だけフレディを捕まえて聞いた話だが、リュシアンはなんと神族の王の使者だという。おまけに神王は彼女を国に招くつもりだと。

これにはセエレも驚きを隠せなかつた。皆が忙しなく動く中、城の中でセエレだけが手持ち無沙汰である。

そのため、愛犬エクスカリバーンと魔王城の屋根の上にいた。ここならば誰かの邪魔をすることはないし、気も遣わなくていい。優しくてあたたかな太陽の光は心地よく、エクスカリバーンもゆらゆらと尻尾を揺らしている。

「……暇だな、エクス」

「わふっ」

一応、城に留まることを許されているものの、セエレは部外者だ。紫の瞳を持つしていても、魔族ですらない。

彼らとセエレは何もかもが違う。持ちうる力も寿命も。似た姿をしていても全く違う存在である。普段はつい忘れてしまうが、彼らには彼らの世界があるのだろう。

「でも、どうして……」

エクスカリバーンを撫でていたセエレの手が止まった。

何よりも驚いたのはリュシアンのこと。魔族と神族について詳しくなくとも、神王が使者を寄越したのは異例の事態だと分かる。

リュシアンは所謂恋敵で、セエレが案じる必要はない。心配のはフヨリシア。

彼女は少なからず神族の青年に心を許していた。ずっと見てればすぐに分かる。彼になら負けても仕方がない。そう思っていたのに。

「本当にリュシアン殿は何を考えているんだ。分かるか、エクス？」

「わう？」

「分かる訳ないな」

セエレは笑い、首を傾げるエクスカリバーンの頭を撫でる。彼に聞いても分かるはずがない。エクスカリバーンはそんな飼い主の事情など知らず、のんきに欠伸をしていた。

白い犬を膝に乗せていたセエレは、何者かの気配を感じて振り返る。

そこにいたのは藤色の髪をした女性だった。セエレと同じ紫の瞳はきらきらと輝いている。手持ち無沙汰なのは、何も自分だけではないらしい。

「セエレ、エクス、ここにいたのか。エクスと同寝とは羨ましい。私も寝ていいか？」

「と言つても他にすることなかつたしね。皆さん色々と忙しいようだし。まあ、ディオネもすることなさそうだし、いいんじやない？」

女性 ディオネは満面の笑みを浮かべ、セエレの隣に腰を下ろ

した。見た目は若い女性とは言え、彼女の中身は子供そのものである。言動も勿論それだ。

セエレもセエレで微妙な立場なのだが、ディオネもかなり特殊だった。

彼女は魔族ではなく、ましてや神族でもない。どちらもあり、どちらでもないのだ。

禁忌の研究によつて生み出されたディオネは魔族と神族の血より生まれた。かつて魔王城から追放された宫廷魔術士が先代の魔王を恨み、作り上げた存在、それこそが彼女なのである。

フェリシアにより解放されたディオネは彼女を慕い、そばにいることを望んだ。

魔王城の面々には好意的に受け入れられているが、ディオネの存在をよく思わない魔族だつている。もつとも、ディオネはそれを気にするタイプではないのだが。

「そりなんだ。みんな忙しそうだし、ローもぴりぴりしてる。リュシアンが神王の使者だというのは、それほど大事なのか？」

「そりゃあ、リュシアン殿は神族で、フェリシア様をよく尋ねて来てたから。おまけに胡散臭いしね」

ディオネはセエレの上で寝そべるエクスカリバーンの頭を撫でながら尋ねる。ローウェルの機嫌が悪いのはいつものことだ。セエレも魔族と神族の軋轢について詳しくないが、彼女の方はさっぱりに近い。

「リュシアンに聞かれたらぼくぼくにされるぞ」

「それは勘弁して欲しいよ。いくら僕が気術を得意としてるからつ

て、ディオネやあの人達と一緒にされたり

彼女の言つ通り、今の言葉をリュシアンが聞けば間違いなくぼこぼこにされるだろ。しかも見惚れるような神々しい微笑を浮かべて。

人族は魔術や神術を使えない代わりに、体内や周囲の氣を操る氣術を扱うことが出来る。

セエレがリュシアンやジュリアの攻撃を受けてもびんびんしているのは、氣術で己を強化しているからだ。

とは言え、人族と魔族や神族では身体能力からして違う。いくらセエレが卓越した氣術の使い手であっても、そればかりはどつじようもない。

「難しいことは苦手だ。……よし、セエレ。殴つていいか？」

「ど」をどつしたらその結果に行き着くの？ 僕は殴つていいものじゃなこよ。ちょ、ディオネ！ 待つて、ストップ！」

「ぐうん……」

清々しく言い切つたディオネは言うなり、セエレの胸ぐらを掴み上げる。色々なものをすつ飛ばした彼女にセエレは慌てるしか無い。リュシアンやジュリア、ローワルの散々な扱いのお陰で、ディオネは自分を殴つていいもの、と認識しているらしい。

思わず後ずさるが、満面の笑みを浮かべてディオネが迫る。その数秒後、魔王城にセエレの絶叫が響き渡つたのはまた別のお話。

フェリシアは一人、執務室で書類と睨み合っていた。

だがそれは表面上だけ。彼女の手は止まつたまま。先ほどから少しも動いていなかつた。

おまけに机の上にはジュリアが運んでくれた紅茶とクッキーが置かれているが、一切手をつけていない。

紅茶は冷めきつており、焼きたてだつたクッキーも既にかたくなり始めている。

クロウにも席を外して貰つたため、完全にフェリシア一人だ。アリストイドが気を利かせてくれたため、訪ねて来る者はいなかつた。普通ならそれでも油断出来ないリュシアンだが、今日はもう来ないだろう。

ただ自分たちの国を見て欲しい。そう言つたリュシアンに、フェリシアは何も言えず、リュシアンも答えを望まなかつた。

一体どうしろと言うのだろう。フェリシアが魔族で、リュシアンが神族なのは、どうやっても変えられないというのに。

「あたしは……」

フェリシアが魔王でなければ、こんな想いを抱くことなどなかつたのだろうか。仮定の話など無意味だと分かつていても、考えずにはいられない。

リュシアンが自分に興味を抱くのは魔王だから? それとも別の

理由があるのか。確かめることなんて出来なかつた。

それでも神王から正式な書状を受け取つた以上、決めなければならぬ。そしてフエリシアも魔王として神王の招待を受けることを決めた。

フエリシア個人の気持ちは関係ない。魔王として下した決断だった。

ならば何を迷うことがある。魔王としてなすべきことをなせばいいだけのこと。

リュシアンは嘘をついてることを認めたが、彼もフエリシアと同じではないのか。

彼の意思と使者であることは必ずしも直結しない。そう考えられないか。

「馬鹿みたい……」

そこまで考えて、フエリシアは自嘲気味に笑う。自分はどこまで彼を信じたいのだろう。本当に反吐が出る。自分の馬鹿さ加減に。良いように利用されているだけではないのか。あの笑顔さえ、偽りだったかもしれない。考えれば考えるほど、疑心暗鬼に陥つてしまう。

「だつてリュシアンは何一つ、教えてくれなかつたのに

フエリシアがリュシアンについて知つていていることはあまりにも少ない。それなのに信じたいなんて、おかしいのだろう。

せめき合つ想い。フエリシアとして、魔王として。自分は“ひとつあるべきなのか。

先王ならば、迷うことなく、答えを出せたのだろうか。まだ彼に遠く及ばないことは分かつていて。分かつていてるが、思わずにはい

られない。誰もが敬い、力を認めるような王になれたら。何事にも揺らぐことのない心が欲しかった。

フェリシアは思つ。先代の魔王ならば、こんな時も迷うことなどなかつたのだろうか、と。

フェリシアの前の代、第一十三代魔王は貴族ではなかつた。魔術よりも武芸に長けた人物で、平民の出だつたのである。

フェリシアに王位を譲つてからは気ままに世界を旅しているらしいのだが、今頃何をしているのだろう。

彼はローウェルと同じ人狼族であるが、かなりはつちゃけた人物で、カリスマ性を持つていた。型破りな王であつたが、表立つて貴族たちに反論させなかつたという。フェリシアはまだ未熟で、彼には到底及ばない。

けれど七大貴族出身で、魔力だけなら歴代魔王の中でも随一とされているのに。

「……分かつてる。あたしはまだまだ未熟。あなたには到底及ばない。でも、思わずにはいられない。もしあなたが魔王であれば、と」
ここにあるのはどうしてもフェリシアが目を通さなければならぬ最低限の書類だ。

『フェリシア』は皆に助けられている。それはとても有難いし、助かつてているのだが、どうしても比べてしまつ。

今まではそれほど気にしていなかつた。自分は自分、彼は彼と。けれど全てリュシアンのせいだ。彼がフェリシアの前に現れたから。うじうじ悩むなんて柄ではないし、それならば直接問い合わせた方が早い。

なのに、出来なかつた。何を聞いてもさつと、彼は軒轅なことを教えてはくれないだうつ。フェリシアの望む答えをくれないだうつ。

「あたしが知りたいのは『リュシアン』について。神族の使者についてじやない

もし先代なら、リュシアンと渡り合ふことが出来ただろうか。さつと出来たはずだ。

一体、自分は何に苛立つてゐるのだろう。さつと不甲斐ない自分自身とリュシアンに、だ。

「情けない。あたしは『魔王』なのに……」

魔王らしくあらねばならない、そう思つのに心は揺れてばかり。何にしても時間は待つてはくれない。既にスケジュール調整は済んでいるのだから。

『魔王』の仮面をつけてリュシアンと接する。『フェリシア』ではなく。それでいいではないか。そう思つのに何故か釈然としなかつた。

フェリシアは眩しかった。薄紅色の髪は勿論、一いつとない孔雀色の瞳も。神族であるリュシアンより眩しい、と言ひ訳ではないが、纏う雰囲気だらうか。

フェリシアが『リュシアン』に向ける瞳にはほんの僅かだが、優しさがあった。

神竜王の加護を受けているから何だと云つのだ。それを言つなら彼女とて魔竜王に愛された者なのだろう。

彼女を見つけたのは偶然だつた。神族であることを隠し、訪れた王都でフェリシアを見つけたのだ。『魔王』ではなく、街娘の姿をした彼女を。

フェリシアの孔雀色の瞳はリュシアンが目にしたどんな宝石よりも美しい。

楽しそうに、無邪気に笑うフェリシアに見惚れた、と言えばいいのだろうか。何の打算もなく。リュシアンの立場では中々誰かに心を許すことはない。神族といつても野心や敵愾心がないわけではないからだ。

『リュシアン』が心を許せるのはあのソールくらいなものだろう。唯一リュシアンをシアン、と愛称で呼ぶ青年。

ソール＝ライバンという名は、リュシアンが彼に与えたもの。彼を拾つたあの日に。

その名は神族の古い言葉で太陽の光を意味する。彼は自分には過ぎた名だと言うけれど、リュシアンはそう思わない。

フェリシアやソールだけではない。魔王城の面々は個性的で、飽きることはないだろう。

魔王至上主義のメイド長に彼女の尻にしかれている補佐、腕は確かだが何を考えているか分からぬ料理長や氷の刃を思わせる騎士団長。

自称フェリシアの愛の奴隸といい、若作り、が禁句な吸血鬼の女王など実に個性的で、若干空氣の読めない妹とやや苦労性な兄庭師の双子や神魔の竜娘、頭が万年花畠な騎士も忘れてはならない。彼らと共にいることで、『リュシアン』であった自分。同胞に囲まれているよりずっと自分らしくあれた。魔王城の彼らはリュシアンにこうしろ、と強要することはない。むしろこんなものだ、と呆れながら納得しているふしがある。

彼ら（魔族）と一緒にいて落ち着くなど、神族失格なのだろうが、リュシアンは聖人などではないのだから。フェリシアと共にいるとリュシアンはリュシアンでいられた。

それでもなすべきことはなすつもりだ。あの仮面をかぶり続けるほかないが、フェリシアの前では『リュシアン』でいたかった。

しかし、それを壊したのは他でもない自分自身。大切にしたい、そう思うと同時に自分について知つてほしいと思つ。矛盾しているのだろう。

リュシアンはグランミコリンに祈らない。仮にも神族であるリュシアンが神竜王に祈ることすらしないというのは大問題である。だが『彼女』は祈らなくても応えてくれるのだ。

もし『自分』を見たら彼女はなんと言うだろう。分からぬ。彼女のことだけが分からなかつた。それでもリュシアンは願う。

『どうか……私を受け入れてください』

ディオネは何ともいえない寂しげな表情で、窓からあるものを眺めていた。彼女の視線の先、そこには金の紋章が刻まれた黒塗りの馬車。フェリシアの紋章である蝶の羽根が輝いており、その周りには黒の軍服を纏った騎士たちが騎乗している。

民達が王を一目でも見ようと殺到していた。ディオネや民からも馬車の中は見えないが、中には勿論、フェリシア。

城下は歓声に包まれており、眺めているだけのディオネも心が踊る。

神王の招待を受けたフェリシアは今日、出発するのだ。ディオネは不本意ながら留守番だった。

リュシアンとソールは親書を携えて既に出発している。セヒレやアリストイドたちは城に残っているものの、いつもの賑やかさはとても感じられない。

フェリシアと共に出発したのはクロウ、エヴァンジェリン、ジウリア、フレディで居残り組はディオネをはじめとしてアリストイド、ローウェル、セヒレ、リーフとリースである。

セヒレと愛犬エクスカリバーン以外は皆、仕事があるらしく、ディオネに構ってくれない。城下に遊びに行くわけにはいかないし、城には遊んでくれる相手もいなかつた。

アリストイドは図書館をすすめてくれたが、生憎小難しい本は読む気にもならない。魔術の手ほどきをしてくれるエヴァンジェリンや、お菓子を作ってくれるジュリアもクロウも留守だ。

アリストイドは忙しそうで、お菓子を作るどころの話ではないだ

るつ。

「むむむ……暇だ」

遊んでくれそうなセエレとエクスカリバーンはどこに行つたか分からぬし、かと言つて皆に迷惑を掛けるのはディオネとて本意ではない。

しかし退屈はディオネの最大の敵である。考へて考へた末、中庭に出ることにした。エヴァンジエリンに常々言われている魔術の修行だ。

ディオネは魔族と神族の血より生み出された神魔。魔術と神術、双方を扱うことが出来るが、強大な力に振り回されがち。

魔族は幼い頃より強大な魔力を制御する術を学ぶのだが、ディオネは違う。生まれてまだ数年しか経つていない上に、技術面がからつきしなのである。

今までただ力を使うだけによかつたが、魔王城で暮らすのなら、そうはいかない。制御されていない力はあまりに危険で、暴走の可能性もある。

ディオネの指南を貰つて出てくれたのはエヴァンジエリンである。見た目は十四、五歳だが、彼女は長い時を生きる偉大なる大吸血鬼。七代貴族の一つアルカード家の前当主で、宫廷魔術士である彼女は魔術士としても非常に優秀だ。

ディオネは魔術や神術を感覚的に使う。そのため、ディオネ自身も“どう”術を扱えばいいか分からぬのだ。

極端な話、小さな炎を出そうとして火事になりかけたりと、中々上手く行かない。

エヴァンジエリンは焦るなと言つてくれるが、少しでもフェリシ

アの力になりたいから。

この力を使いこなすことが出来れば、きっとフェリシアの役に立てる。それが自分を暗闇から連れ出してくれた彼女に出来る恩返しだと思う。

中庭へ向かう途中、数人の侍女たちとすれ違つたが、少し元気がないよう。フェリシアたちがいなからだらうか。

彼女たちはディオネを見て頭を下げた。ディオネがフェリシアのそばにいることを知つてゐるのだろう。

中庭には誰もいなかつた。本来ならこんな場所で訓練する訳にはいかないが、大規模な術を使わなければ問題ない。

それに精神を集中させるには緑が多い方がいい。落ち着くのだ。かつていた場所も緑に囲まれていたから。

ふう、と息を吐き、精神を集中させる。ディオネ自身は苦手なのだが、エヴァンジエリンに言われて瞑想も続けていた。

魔族や神族は呼吸するように術を使う。ディオネもそこは同じだが、力を引き出し過ぎてしまうのだ。だからこそ、集中して力を調整しなければならなかつた。

『夜と混沌を司りし魔竜王ラインハルトよ。我が声と意思に応え、黒き炎を……』

よほど高位の術でなければ詠唱は必要ない。ディオネの場合は精神集中のためと、力をコントロールするために歌う。

要は集中出来ればいいため、必ずしも詠唱である必要はない。気持ちの問題なのだ。

ディオネの手の間に生まれたのは、闇を溶かしたような黒き炎。猛々しく燃え盛るそれは、ディオネの制御を破り、暴れ回ろうとしている。ほんの少し、炎を生み出すだけのつもりだった。

もしここで術が暴発すれば無事では済まないだろう。

魔王城は強力な結界に覆われているが、中からの攻撃では意味がないのだ。少なくとも中庭は無事では済まない。リーフとリースが丹精込めて世話をしているこの庭は。

その刹那、文字通り、世界が凍りついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3792x/>

月色ラプソディ

2012年1月5日20時57分発行